

箱崎土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告VI

箱 崎 26

— 箱崎遺跡第30次調査報告(1) —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第914集

2006

福岡市教育委員会



箱崎土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告VI

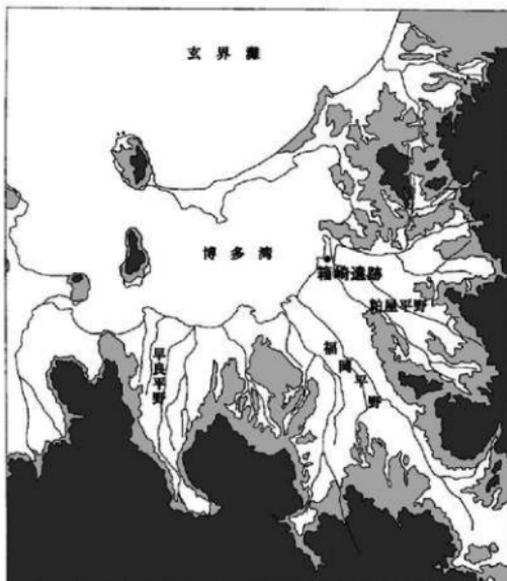
HAKO

ZAKI

箱崎 26

— 箱崎遺跡第30次調査報告(1) —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第914集



2006

福岡市教育委員会

序

古くから、アジア大陸との対外交渉の門戸として発展を遂げてきた福岡市には、有形・無形の優れた文化財が数多く残されており、これらの文化財は、先人が築き上げたこの福岡の歴史と文化を理解する上で、欠くことのできない貴重な遺産です。本市ではこのことを念頭に、昭和48年に福岡市文化財保護条例を制定するとともに、多岐にわたる文化財を保護し活用するように努めてまいりました。

その一方、近年の都市開発による本市の歴史的環境の変化には著しいものがあります。本市教育委員会では、開発により失われてゆく埋蔵文化財を記録保存する目的で、発掘調査を実施しています。

本書は、筥崎土地区画整理事業に伴い調査を実施した箱崎遺跡第30次調査のうち、15区と16区の成果を報告するものです。箱崎地区は、隣接する博多地区と並んでわが国と海外との交渉に大きく関与した歴史的な都市遺跡であり、現在でも福岡市の都市部の一面を形成しています。今回の調査では、筥崎宮創建以後の平安時代中期から鎌倉時代にかけての集落跡を検出し、輸入陶磁器など多数の貴重な遺物が出土しました。また、古墳時代の集落も確認でき、多彩な成果を得ることができました。

今後、本書が文化財への理解と認識を深める一助になるとともに、学術研究の資料として内外で活用していただければ幸いに存じます。

末尾になりましたが、発掘調査から本書の作成にいたるまで、費用負担を含めて多大なご協力をいただきました福岡市土木局をはじめ、箱崎・馬出・筥松地区の皆様等関係各位に厚く御礼申し上げます。

平成18年12月28日

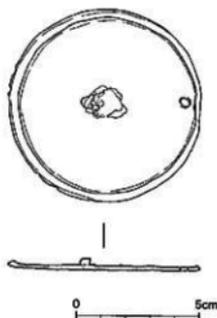
福岡市教育委員会

教育長 植木 とみ子

遺跡調査番号	0210		遺跡略号	HKZ-30	
地番	福岡市東区箱崎一丁目		分布地区番号	箱崎034	
開発面積	1,487㎡	調査対象地	1,487㎡	調査面積	1,487㎡
調査期間	平成14年4月15日～平成15年3月31日				

例 言

1. 本書は、福岡市教育委員会が菅崎土地区画整理事業に伴い、福岡市東区箱崎1丁目・馬出5丁目地内で発掘調査を実施した箱崎遺跡第30次調査のうち、15区及び16区の報告書である。
2. 調査記録の作成および整理分担は、次のとおりである。
遺構実測……………松浦一之介、城門義廣（現 大野城市教育委員会）
遺物実測……………松浦一之介、山口裕平（現 行橋市歴史資料館）、谷直子（九州大学大学院生）
遺構写真撮影……………松浦一之介
遺物復元……………木下久美子、田中由紀、宮崎由美子、長浦英美子
金属製品保存処理…比佐陽一郎、片多雅樹（福岡市埋蔵文化財センター）
製 図……………松浦一之介、木下久美子、山口朱美、谷直子
本文執筆……………松浦一之介
3. 本書で使用した方位は磁北であり、座標は国土調査法第1系に拠る。また、標高は東京湾平均海面高度（T.P.）に拠る。
4. 本書で使用した地図は国土地理院発行の「1/25,000 福岡」および福岡市発行の福岡市都市計画図を原図としている。
5. 本書で使用した遺構の略号は、奈良文化財研究所の用例である。
6. 本書に関わる遺物および記録等の全資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵される予定である。
7. 本書の編集は、松浦一之介が行った。



青銅鏡 (SK-379)

SK-379 出土。緑青に覆われていたことから、発掘直後に埋蔵文化財センターで保存処理を施しそのまま収蔵した。

海綠色をした青銅製品で、金属分析は済ましていないが、1mm前後の薄さにはしっかりした鋳造品である。直径7.74cm×7.79cmのほぼ正円。表裏とも素紋。縁は厚さ1.95mmながら蒲鉾状に薄く盛り上がっている。さらに中央に銚のような残欠が認められ、縁部にわずかに反りもあることから鏡と推測した。共存遺物には、図57のように弥生土器1点があるものの、大部分が土師器、白磁、青磁など中世遺物であり、さらに鏡縁近くに直径3.2mmの小孔が鋳造後に穿たれていることなどから、弥生時代の倣製鏡ではなく、中世の懸仏のように吊して使用された遺物と考えられる。

本文目次

第1章 はじめに	1
第2章 遺跡の地理的・歴史的環境	2
第3章 調査の記録	5
1. 調査の概要	5
2. 15区の調査	6
(1) 概要	6
(2) 井戸	6
(3) 溝	8
3. 16A区の調査	10
(1) 概要	10
(2) 竪穴住居跡	12
(3) 井戸	15
(4) その他の出土遺物	20
4. 16B区の調査	21
(1) 概要	21
(2) 甕棺墓	22
(3) 竪穴住居跡	22
(4) 井戸	28
(5) 土壌	33
第4章 結語	46

図版目次

図1 箱崎遺跡位置図 (縮尺1/50,000)	3
図2 箱崎遺跡調査区位置図 (縮尺1/5,000)	4
図3 箱崎区画整理事業地内調査区位置図 (縮尺1/5,000)	5
図4 15区調査区位置図 (縮尺1/1,000)	6
図5 15区全景 (南から)	7
図6 15区遺構配置図及び土層断面図 (縮尺1/200、1/50)	7
図7 15区調査区土層断面 (南東から)	7
図8 15区井戸及び遺物出土状況実測図 (縮尺1/50、1/20)	9
図9 SE-004井戸 (北から)	9
図10 SE-003井戸遺物出土状況 (北から)	9
図11 SE-005井戸遺物出土状況 (西から)	9
図12 15区出土遺物実測図 (縮尺1/3)	9
図13 16区調査区位置図 (縮尺1/1,000)	10
図14 16-A区遺構配置図 (縮尺1/200)	11
図15 16-A-1区全景 (南から)	11
図16 16-A-2区全景 (南から)	11
図17 16-A区調査風景 (南から)	11
図18 16-A区調査区東壁土層図 (縮尺1/100)	12
図19 16-A区竪穴住居跡及び遺物出土状況実測図 (縮尺1/50、1/20)	13
図20 SC-066全景 (南から)	14

図 21	SC - 066 遺物出土状況 (東から)	14
図 22	SC - 169 全景 (南から)	14
図 23	SC - 067 遺物出土状況 (東から)	14
図 24	16 - A 区竪穴住居跡他出土遺物実測図 (縮尺 1/3)	14
図 25	SE - 093 全景 (西から)	16
図 26	SE - 092, 148 全景 (南から)	16
図 27	SE - 139 全景 (西から)	16
図 28	SE - 139 遺物出土状況 (南から)	16
図 29	16 - A 区井戸及び遺物出土状況実測図 (縮尺 1/50, 1/20)	17
図 30	SE - 092, 139, 148 井戸出土遺物実測図 (縮尺 1/2, 1/3, 1/4)	18
図 31	SE - 093 井戸出土遺物実測図 (縮尺 1/2, 1/3, 1/4)	19
図 32	16 - B 区全景 (北から)	21
図 33	16 - B 区遺構配置図 (縮尺 1/200)	22
図 34	16 - B 区竪穴住居跡及び妻棺墓実測図 (縮尺 1/50, 1/20)	23
図 35	SC - 2001 全景 (西から)	24
図 36	剣先形石製品出土状況 (西から)	24
図 37	勾玉出土状況 (北から)	24
図 38	SC - 2001 土器出土状況 (南から)	24
図 39	SC - 2002 全景 (北東から)	24
図 40	SC - 2003 全景 (西から)	25
図 41	ST - 2005 検出状況 (東から)	25
図 42	ST - 2005 妻実測図 (縮尺 1/4)	25
図 43	16 - B 区竪穴住居跡他出土遺物実測図 (縮尺 1/2, 1/3)	27
図 44	SE - 440 実測図 (縮尺 1/50)	29
図 45	SE - 440 全景 (北から)	29
図 46	SE - 440 出土遺物実測図 (縮尺 1/3, 1/2)	30
図 47	SE - 515 実測図 (縮尺 1/50)	31
図 48	SE - 515 全景 (南から)	31
図 49	SE - 515 出土遺物実測図 (縮尺 1/3, 1/4)	32
図 50	SK - 001 遺物出土状況 (西から)	34
図 51	SK - 001, 004 遺物出土状況及び出土遺物実測図 (縮尺 1/20, 1/3)	34
図 52	SK - 006 遺物出土状況実測図 (縮尺 1/20)	35
図 53	SK - 006 出土遺物実測図 (縮尺 1/3, 1/4)	36
図 54	SK - 009 遺物出土状況 (東から)	38
図 55	SK - 009 遺物出土状況実測図 (縮尺 1/20)	38
図 56	SK - 009 出土遺物実測図 (縮尺 1/3)	39
図 57	16 - B 区土塙遺物出土状況実測図 (縮尺 1/20)	40
図 58	SK - 349 遺物出土状況 (東から)	41
図 59	SK - 446 遺物出土状況 (西から)	41
図 60	SK - 004 遺物出土状況 (西から)	41
図 61	SK - 006 遺物出土状況 (西から)	41
図 62	SK - 011 遺物出土状況 (西から)	41
図 63	SK - 379 遺物出土状況 (北から)	41
図 64	16 - B 区土塙出土遺物実測図 (縮尺 1/3)	42
図 65	SK - 446 出土遺物実測図 (縮尺 1/3)	45

第1章 はじめに

1. 調査に至る経緯と調査体制

福岡市土木局宮崎連続立体交差開発事務所換地課長から、平成6年8月24日付、土管第476号により同市教育委員会文化財部埋蔵文化財課長宛に、東区馬出・宮松および博多区吉塚本町における福岡都市計画事業である宮崎土地区画整理事業（事業面積：27.8ヘクタール）に伴う埋蔵文化財事前審査についての依頼がおこなわれた（埋蔵文化財課事前審査番号：7-1-50）。

同事業は、平成4年1月17日に都市計画決定がおこなわれ、同年9月14日の事業計画決定がなされた。その事業目的は、東区の中心地域として位置付けられている箱崎地区の道路や公園などの公共施設の未整備や、土地の細分化、家屋密集などによる市街地環境の低下、また道路と鉄道（JR鹿児島本線・篠栗線・筑豊線）の平面交差による踏切事故防止や、慢性的な交通渋滞の緩和などのため、都市計画道路等の整備・改善や鉄道高架による道路との立体交差化、また高架事業に伴うJR箱崎駅の移設を実施し、良好な市街地の形成と都市機能の向上を図るものであった。

埋蔵文化財課では、事業地が周知の埋蔵文化財包蔵地である箱崎遺跡の範囲及びその隣接地に含まれることから、平成6年9月14日より建物移転の終了した箇所を順次試掘調査した。また、旧JR箱崎駅2・3番線ホーム撤去後の平成15年2月26日に、同構内を試掘調査した。結果、中世を主体とする遺構群が、東側はJR鹿児島本線、西側は事業地の南端を範囲とする総面積約35,000㎡において確認された。この試掘調査の結果をもとに、両課は当該地の埋蔵文化財について現地保存を前提とした協議をおこなった。その結果、1号公園部分（事業面積2,500㎡）を除き事業計画上、現地保存は不可能と判断され、事業により遺構の破壊が避けられない部分について、平成11年度から本調査を、また平成14年度から資料整理および調査報告書の作成を継続して行うこととなった。

尚、本調査および整理報告に係る費用は、全て事業主体である福岡市土木局宮崎連続立体開発事務所が負担した。調査の体制は以下の通りである。

<調査体制>

調査委託	福岡市土木局宮崎連続立体開発事務所		
調査主体	福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課（現 埋蔵文化財第1課）		
調査総括	埋蔵文化財課長	山崎 純男（前任）	
	埋蔵文化財第1課長	山口 謙治	
	同課調査第2係長	力武 卓治（現 埋蔵文化財第2課長）	
	埋蔵文化財第1課調査係長	山崎 龍雄	
調査庶務	文化財整備課（現管理課）	御手洗 清（前任）、鈴木 由喜（現任）	
調査担当	埋蔵文化財課調査第2係	佐藤 一郎（現 福岡市博物館学芸課）	
		松浦 一之介（現 埋蔵文化財第1課事前審査係）	

尚、発掘調査から報告書作成に至るまで、福岡市土木局宮崎連続立体開発事務所をはじめ、箱崎・馬出・宮松地区の地域住民等関係各位には多大なご協力とご理解をいただいた。記して謝意を表する次第である。

第2章 遺跡の地理的・歴史的環境

箱崎遺跡は、箱崎砂層と呼ばれる新砂丘上に展開する古代・中世集落を中心とする複合遺跡である。箱崎砂層は、海の中道によって外海の玄界灘から隔てられた博多湾沿岸に形成されている。この砂層は、福岡市東区貝塚から早良区室見川河口に達する長さ約10kmの範囲に展開し、現在の福岡都心域とほぼ重複している。箱崎砂層の形成時期については、少なくとも縄文時代晩期を下らないとする自然科学的知見が得られている。箱崎周辺の砂丘は、博多部から北東方向へ砂嘴状に延びており、箱崎遺跡はこの砂丘の北端部分に立地している。箱崎砂層の後背部にはこれよりも古い時期に形成された沖積地である広後の福岡平野が広がり、そのうち箱崎遺跡の後背部は、多々良川とその水系である須恵川・宇美川が形成した粕屋平野である。なお、箱崎遺跡の南西側約2kmに位置する博多遺跡群とは、現在御笠川(石堂川)によって隔絶しているが、同川は戦国時代、大友氏の家臣・白杵安房守によって開削されたものであり、元来は同一の砂丘である。

海岸部の砂丘上には図1に示したように、箱崎遺跡や博多遺跡群のほか、吉塚遺跡、吉塚本町遺跡、吉塚祝町遺跡、堅粕遺跡などが立地している。これらの遺跡群は、砂丘の鞍部や河川・旧河川によって区画されるものと考えられ、その微高地に立地している。

箱崎遺跡では、平成18年10月現在、54次にわたる調査が実施された。これまでの調査で出土した最古の遺物は、第6次調査地点の磨製石斧や第20次調査地点の刻目突帯文甕片である。しかしながらこの時期の明確な遺構は現在のところ未検出である。古墳時代の遺構としては第8、20、22、26、30次調査等で堅穴住居址や周溝墓、甕棺墓等が検出された。いずれも砂丘の東側緩傾斜面に形成されており、集落の占地に際して比較的安定した自然環境を選択したと推定される。

それ以後、宮崎宮が創建された10世紀前半ま

での遺構は現在のところ確認されていない。10、11世紀代の遺構群は同宮の南東側で検出されており、越州窯系青磁や高麗青磁などの輸入陶磁器の他、帯金具、瓦等の官衙関連遺物が比較的多く出土している。また、楠葉系瓦器碗など中央権門との結びつきを窺わせる遺物も出土している。

12世紀中頃以降、砂丘西側の緩傾斜面の利用が始まり、後半以降は箱崎遺跡の広範囲において遺構群が確認される。また、遺跡南西側に位置する第13次調査地点では、15世紀代の町家の構造を示す遺構が検出されており、箱崎地区の町割り等を考察する上で貴重な資料を提供している。

箱崎遺跡の発展に大きな役割を果たした宮崎八幡宮は、延喜21年(921)、大宰府観世音寺の巫女に八幡大菩薩の託宣があり、延長元年(923)に筑前穂波郡大分八幡宮を遷座したものと伝えられている。遷座は、新羅来疫の折壊と大宰府官人層による対外交渉の拠点とする目的が大きいと考えられる。宮崎津と呼ばれる港湾施設は、宇美川が蛇行する同宮の後背部にあったと推定されているが、遺構の検出には至っていない。保延6年(1140)、宮崎八幡宮は神人の濫行がもとで香椎宮とともに大宰府領となり、仁平元年(1151)には大宰府検非違使所別当安清らが500余騎を率いて、博多・箱崎で大道捕を行い、宋人王昇後家をはじめ1,600家の資材を運び去り、宮崎宮にも乱入し、神宝を強奪したことが記録されている。このような記述から、宮崎宮の周辺には創建以後神宮寺などの宗教施設が建ち並んでいたほか、博多に連続してかなりの規模の宋人居留地を形成していたものと推測される。

文永11年(1274)年の役をはじめ宮崎宮は数度にわたり焼失している。14世紀前半に元の慶元府(現在の寧波)を出発し日本への航行中、現在の全羅南道新安沖に沈没した貿易船の引揚げ遺物には、「宮崎奉加銭」銘の木簡があり、当該期の交易拠点の一つであったと考えられる。

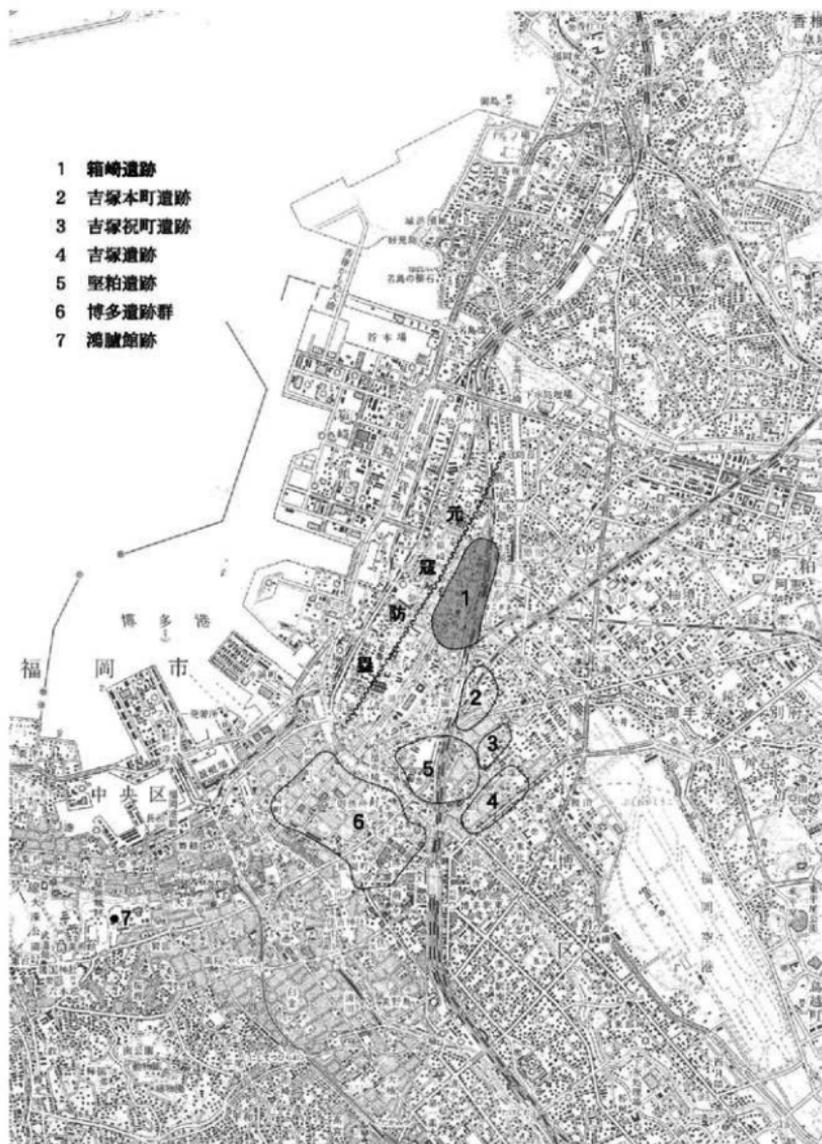


図1 箱崎遺跡位置図(縮尺 1/50,000)

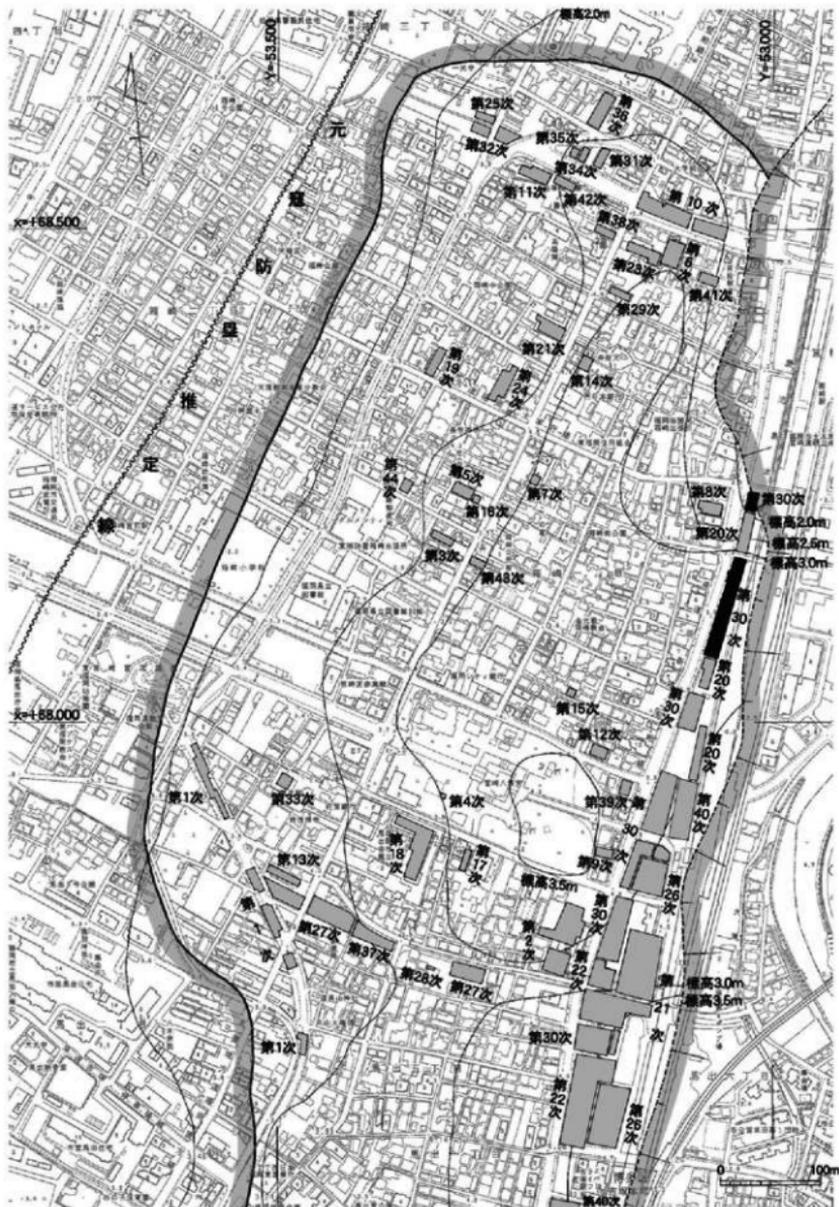


図2 箱崎遺跡調査区位置図 (縮尺 1/5,000)

第3章 調査の記録

1. 調査の概要

第30次調査は、11～16区の6地点に分かれている。本書で報告するのは、このうち15区と16区の2区である。なお、宮崎区画整理事業に伴う発掘調査では、この調査区呼称を調査回数や調査年度にかかわらず、調査着手順の通し番号として使用している。

本報告の発掘調査は、平成14年4月15日に15区の重機による表土剥ぎから開始し、表土剥ぎの後人力による遺構検出・掘り下げを行い、写真と図面による記録を作成した。各調査区では、古墳時代の竪穴住居跡、土壇、古代・中世の井戸、土壇、溝、柱穴などを検出した。平成15年3月31日に発掘器材の撤収を行い、調査を終了した。調査面積は1,487㎡ある。

調査時の遺構番号は、各区ごとに第1面は001から3桁の通し番号を、また第2面は2001から4桁の通し番号を遺構の種類別にかかわらず付与している。遺構番号に重複はない。但し欠番がある。本書における遺構の記述は、例言に記した遺構略号と3ないし4桁の遺構番号および遺構の名称を組み合わせて使用している。

今回の調査は、区画整理という性格上、街区や道路形状が、事業施行後に大きく変化するため、国土座標（第Ⅱ座標系）による調査区管理を行っている。また、調査区にはこの座標軸を基準とした10m毎のグリッドを組んだ。グリッドは英字（東から西へA、B、・・・）とアラビア数字（北から南へ1、2、・・・）で表記している。

次節以下、各区ごとに検出遺構と出土遺物について報告する。

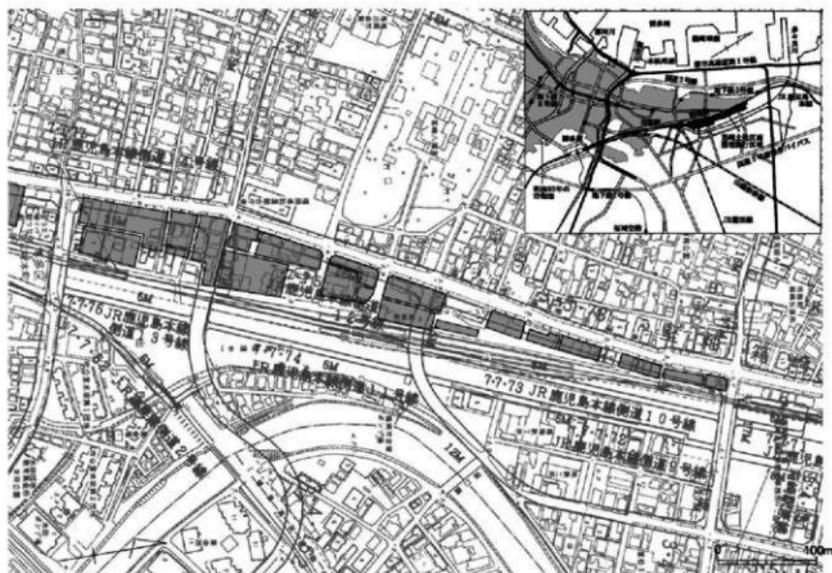


図3 宮崎区画整理事業地内調査区位置図（縮尺 1/5,000）

2. 15区の記事

(1) 概要

15区は、東区箱崎1丁目5番地内に位置する。箱崎区画整理事業地内の調査区のうち、最も北側に位置し、箱崎遺跡の東端部にあたる。調査前の現況は専用住宅や病院解体後の更地で、高架になる以前のJR鹿児島本線線路が東に接していた。調査面積は208㎡ある。

調査区の基本層序は、表土及び攪乱層（1層）、黒褐色砂質土層（2層）、黒褐色砂質土層（3層）、その下に砂丘基盤である黄褐色砂が堆積する。砂丘面の標高は、調査区南壁の西端部で標高2.25m、東端部で標高1.1mを測り、西から東に向かって砂丘面が急激に落ちている。この砂丘の落ちは、黄褐色や茶褐色細砂を多く含んだ灰褐色砂質土（図6下土層図3、4層）によって整地されている。整地層は数段階に分けられ、平坦面を順次拡大していったと考えられる。整地は最も厚い部分で、

検出面から約1.0mを測る。整地層は土層観察とこの部分で検出された遺構の出土遺物から、13世紀以降に行われたものと推定される。また、砂丘の落ちに沿って南北方向の1条の中世溝が検出されたが、これは現在の周辺街区とほぼ同一であり、箱崎集落の形成は砂丘の形状に大きく左右されていたと見て大過ないものと考えられる。

検出遺構は、井戸、溝、ピットなど僅かで、箱崎遺跡の他の調査区と比較すると遺構密度が非常に薄い。出土遺物は土師器（皿、坏）、中国産白磁（碗、皿）、中国産青磁（碗、皿）、石製品（滑石製石鍋）、近世陶器などで、総量はコンテナケース3箱分である。

(2) 井戸

調査区内で井戸は3基が確認された。いずれも整地層上面から掘り込まれていたものと考えられるが、調査時点にこの整地層を大きく除去したので、掘削面での形状が明確にできない。

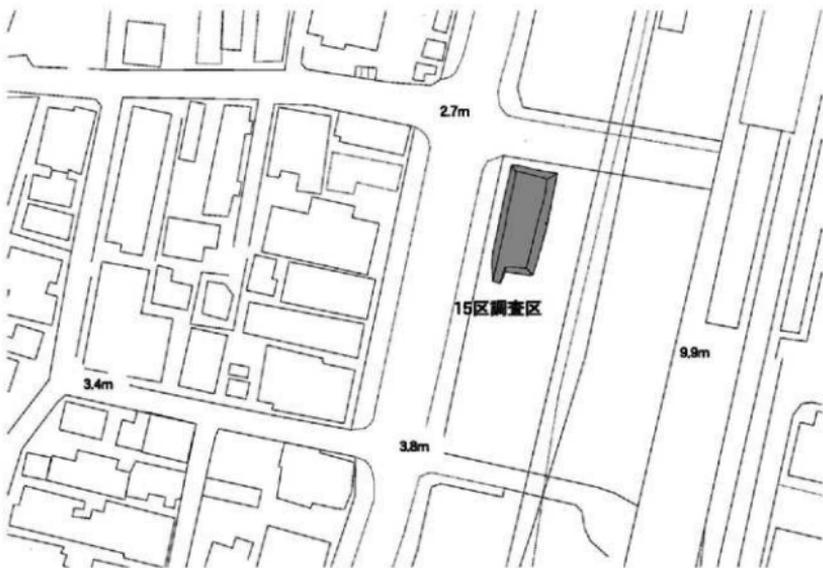


図4 15区調査区位置図（縮尺1/1,000）

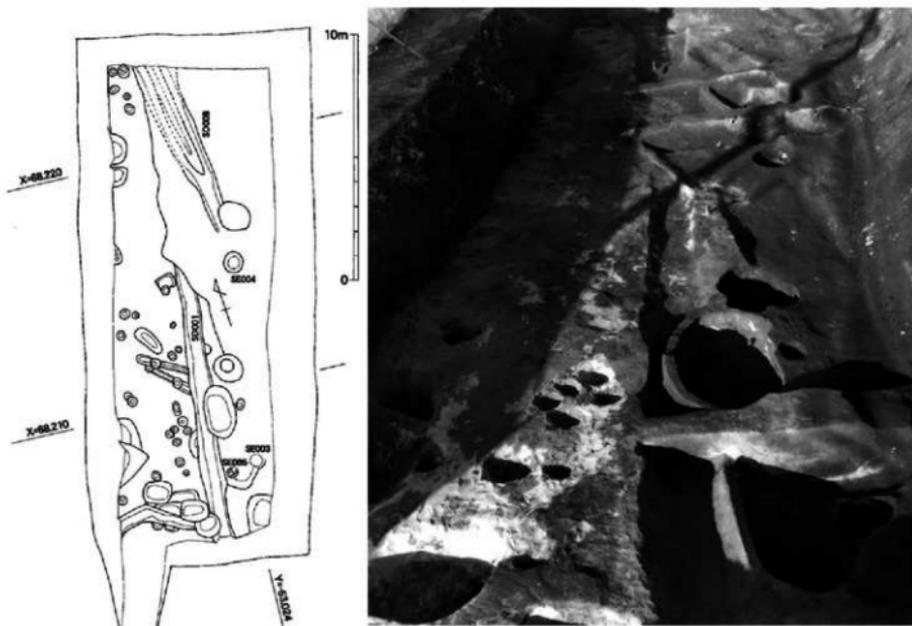


図5 15区全景(南から)

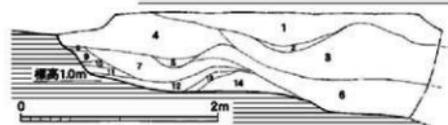
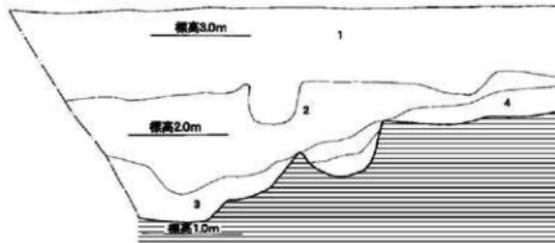


図6 15区遺構配置図及び土層断面図(縮尺 1/200、1/50)



図7 15区調査区土層断面(南東から)

15調査区東層土層注記

- 1層 黄土のみで構成
- 2層 黄褐色砂質土層 跡ありあり。
- 3層 黄褐色砂質土層 跡ありあり。
- 4層 黄褐色砂質土層 跡ありあり、黄褐色砂含む。

15調査区ベルト北層土層注記

- 1層 黄褐色土層 跡ありあり、近表面。
- 2層 黄褐色砂質土層 跡ありあり、近表面。
- 3層 黄褐色砂質土層 跡ありあり、細砂多く含む。
- 4層 黄褐色砂質土層 跡ありあり、細砂多く含む。
- 5層 黄褐色砂質土層 跡ありあり、黄。
- 6層 黄褐色砂質土層 跡ありあり、黄褐色。
- 7層 黄褐色砂質土層 跡ありあり、黄褐色。
- 8層 黄褐色砂質土層 跡ありあり。
- 9層 黄褐色砂質土層 跡ありあり。
- 10層 黄褐色砂質土層 跡ありあり、砂含む。
- 11層 黄褐色砂質土層 跡ありあり。
- 12層 黄褐色砂質土層 跡ありあり、細砂含む。
- 13層 黄褐色砂質土層 跡ありあり、細砂含む。
- 14層 黄褐色砂質土層 11層に準ず。

SE-003 (図8, 10)

SE-003は調査区の南側、A-3グリッドで検出した。他の遺構との切り合い関係はない。底部付近の掘り込みは、ほぼ垂直に近い急傾斜で行われている。井筒は、結物の桶を使用したものと考えられるが、その痕跡を留めるのみであった。井筒部分の直径は約0.45mのやや歪んだ円形を呈する。底部は標高0.65m付近で、直径約0.5mのやや歪んだ円形を呈する。底部付近から半欠した龍泉窯系青磁碗片が出土しており、井戸廃棄の段階に投入されたものと推測される。

出土遺物 (図12)

11は青磁碗底部片を利用した釜打で、底径6.4cm、残存径6.9cmを測る。12は龍泉窯系青磁碗で、口径16.0cm、器高6.9cm、底径5.6cmを測る。見込みが「金玉満堂」のスタンプが押されるが、不明瞭で判読しづらい。底部付近から出土しており、井戸の廃棄の段階における祭祀等で投入されたものと推測される。

SE-004 (図8, 9)

SE-004は調査区の中央東側、A-2グリッドで検出した。他の遺構との切り合い関係はない。底部を検出したのみである。遺存する部分での掘り込みは、やや急傾斜で行われる。井筒は、結物の桶を使用したものと考えられ、その痕跡を確認した。形状は、直径約0.4mのやや歪んだ円形を呈する。底部は標高0.75m付近で、直径約0.45mのやや歪んだ円形を呈する。

出土遺物には、土師器皿小片などが僅かにあるが、図化に耐えない。

SE-005 (図8, 11)

SE-005は調査区の南側、B-3グリッドで検出した。SK-000土壌によって切られており、遺存状況は良好でない。底部を検出したのみである。遺存する部分での掘り込みは、ほぼ垂直に行われる。井筒は、結物の桶を使用したものと考えられ、僅かに木質が遺存していた。形状は、直径約0.45mを測るやや歪んだ円形を呈する。底部は標高0.45m付近で、直径約0.5mのやや歪んだ円形を呈する。底部付近から破砕された使用痕のある滑

石製石鍋(15)が出土しており、井戸廃棄の段階に祭祀等で投入されたものと推測される。

出土遺物 (図12)

13は龍泉窯系青磁碗で、口径15.6cm、器高7.0cm、底径6.2cm。体部に笠で雲文が施される。14は土師器皿で、口径9.5cm、器高1.3cm、底径7.5cmを測る。胎土は概ね精良で、色調は明るい灰みの橙褐色を呈す。15は滑石製石鍋で、口径24.6cm、器高10.3cm、底径21.6cmを測る。短い鋳が上位に運る。底部に使用痕である多量の煤が付着している。底部付近から出土しており、廃棄の段階で投入されたものと推定される。

(3) 溝

中世の溝には調査区南半で検出されたSD-001がある。A-1, 2グリッドで検出されたSD-008は整地以前の所産で、廃棄の時期は近世と考えられる。陶器碗(8)等が出土している。

SD-001

SD-001は調査区の南半、B-2, 3グリッドで検出した。小溝やピットを切り、土壌などに切られる。主軸はN-12°-Eを測り、南北方向に掘削されており、長さは約11.5mを検出し、検出面からの深さは0.3mを測る。断面の形状は緩やかな円弧を描く。

出土遺物 (図12)

1は陶器皿の口縁部片で復元口径10.0cm。胎土は概ね精良で、色調は赤みの灰褐色を呈する。2は白磁碗の底部片で、底径6.6cm、口径9.5cm、器高1.3cm、底径7.5cm。3は同安窯系青磁碗の底部片で、底径5.0cm。4は白磁碗の底部片で、底径7.0cm。色調はいずれも黄みの白色を呈する。6, 7は土師器皿。5は青磁碗の底部片で、底径5.4cm。釉に嵌入が見られる。胎土は精良で、色調は緑みの明灰色を呈する。6は口径8.4cm、器高1.1cm、底径6.6cm。胎土に白色砂粒を含む。色調は薄い黄褐色を呈する。7は口径14.0cm、器高2.6cm、底径10.0cmの坏。胎土やや粗く白色細砂・粗砂を含む。色調は薄い黄褐色を呈する。いずれも底部は糸切りである。

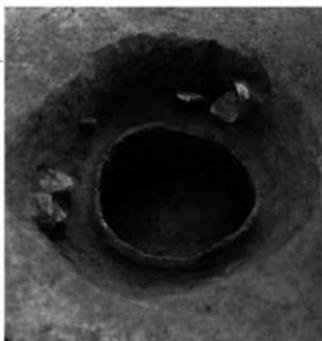
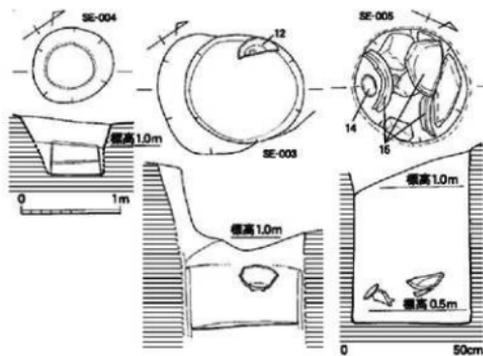


図8 15区井戸及び遺物出土状況実測図 (縮尺 1/50、1/20)

図9 SE-004井戸(北から)



図10 SE-003井戸遺物出土状況(北から)



図11 SE-005井戸遺物出土状況(西から)

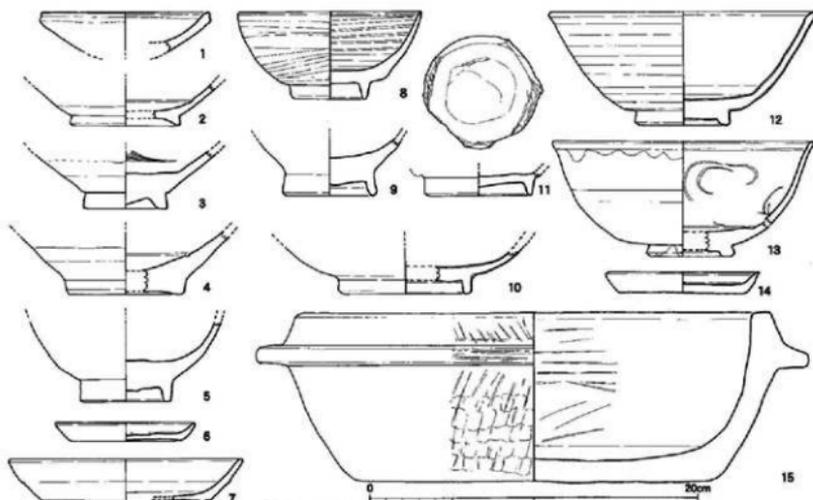


図12 15区出土遺物実測図 (縮尺 1/3)

2. 16-A区の記録

(1) 概要

16-A区は、東区箱崎1丁目4番地内に位置する。箱崎区画整理事業地内の発掘調査区のうち北端部付近に位置し、平成11年から12年にかけて調査が行われた20次調査1区の南側に隣接する。調査前の現況は専用住宅及び共同住宅解体後の更地で、高架になる前のJR鹿児島本線線路が東側に隣接していた。調査面積は503㎡ある。

遺構の遺存状態は全体的に良好でなく、特に調査区の南側は、共同住宅の基礎等が深く、遺構を大きく破壊していた。

調査区の基本層序は、表土及び擾乱層（1層）、黒褐色砂質土層（2層）、黒褐色砂質土層（3層）が堆積する。その下に砂丘基盤である黄褐色砂が堆積し、以下標高2.9m付近で黄褐色粗砂層となる。砂丘面の標高は、北端部で2.9m、南端部は擾乱が著しいが遺存状況の良好な箇所と同じく2.9m

程度であり、調査区内での比高差はほとんど確認されなかった。また北側に隣接する1区南端部での標高は3.1mと報告されており、本調査区に向かってやや低く傾斜するものと考えられる。これまでの調査成果では、周辺地形の標高は南に向かって高くなると予想されているが、微高地や鞍部が入り組んでいる可能性も考えられる。

検出した遺構は、古墳時代中期のもの、中世に大別される。古墳時代中期の遺構としては、竪穴住居跡4棟を確認したが、大部分が後世の遺構や擾乱で破壊されており遺存状況は良好でない。出土遺物には古式土師器（小型丸底壺、小型埴、高坏）、須恵器（坏身）、竈などがある。住居跡内の覆土を磁洗したところ、一定量の鉄片を検出することができた。中世の遺構としては、井戸、溝、ピットなどがある。箱崎遺跡の他の調査区と比較すると遺構密度が非常に薄い。出土遺物は土師器（皿、坏、高台付皿、高台付坏）、土師質土器（器台）、瓦器（碗）、中国産白磁（碗、皿）、中国産青磁



図13 16区調査区位置図（縮尺1/1,000）

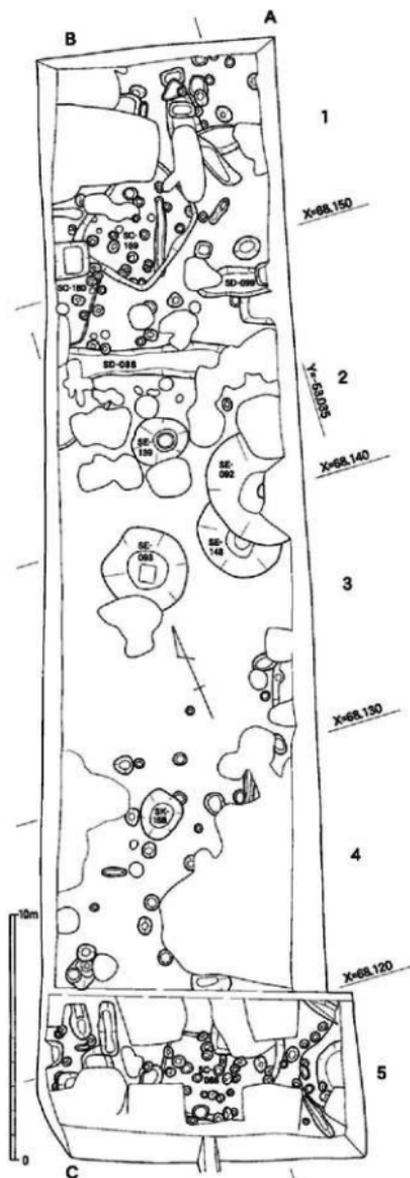


図14 16-A区遺構配置図 (縮尺 1/200)



図15 16-A-1区全景 (南から)



図16 16-A-2区全景 (南から)



図17 16-A区調査風景 (南から)

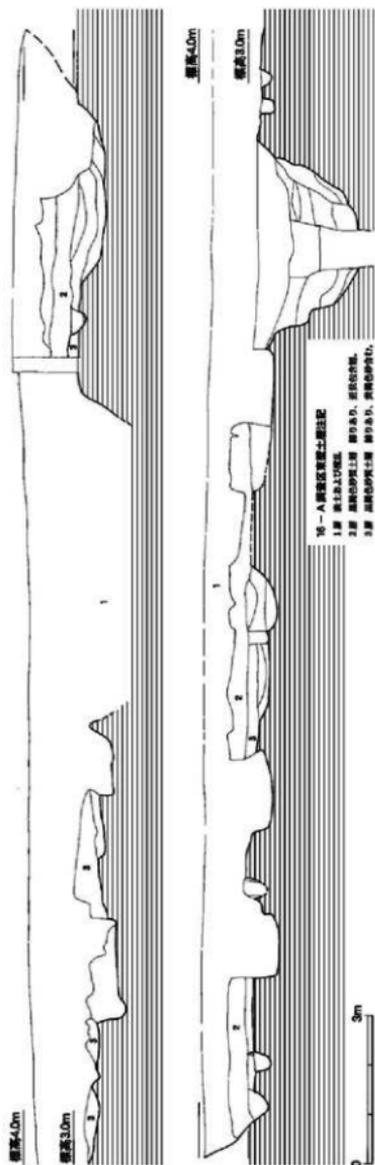


図18 16-A区調査区東壁土層図(縮尺1/100)

(碗、皿)、中国産陶器(四耳壺)、瓦(丸瓦、平瓦)、土製漁鏝などで、総量はコンテナケース19箱分である。このほか突帯文土器片1点があるが、当該期の遺構は検出されなかった。

(2) 竪穴住居跡

調査区内で竪穴住居跡は4棟が確認された。そのうち2棟は、住居跡のごく一部を検出したに過ぎないが、出土遺物と形状から竪穴住居跡として認定した。

SC-066(図19~21)

SC-066はB-5グリッドで検出された。隅角部分4箇所を共同住宅の基礎が破壊しており、遺存状況は良好でない。各辺の状況から、長辺4.6m×短辺3.4mの隅丸長方形を呈すると考えられる。覆土には暗黄褐色砂が堆積し、遺構検出面から約25cm下で床面を検出した。床面の占有面積は、15.6㎡と推測される。主軸に沿ってピット2個を検出し、主柱穴と考えられる。

出土遺物(図19、21、24)

出土状況

出土遺物は僅少であるが、床面から精製小型丸底壺が置かれた状態で出土しており、住居跡の年代を示すものと考えられる。なお口縁部が欠損するが、これは上面が後世の遺構に切られているためである。図示した他、古式土師器片がある。

須惠器(19)

19は口径9.8cm、器高4.6cm、受部径11.7cmを測る坏身。口縁部はやや長く、内傾気味に立ち上がり、端部にやや鈍い段が付く。底部約2/3に回転削りを施す。焼成は良好で、体部外器面に自然釉が付着。色調は黄みの明灰色を呈す。

古式土師器(20)

20は残存高14.5cm、頸部径5.4cm、胴部最大径14.5cmを測る精製小型丸底壺。口縁端部が欠損する。頸部がよく締まり、内器面に明瞭な段が認められる。胴部は扁平な球形を呈し、頸部から口縁部にかけては直線的に延びるものと考えられる。焼成良好で、色調は明るい橙褐色を呈す。床面直上から出土した。

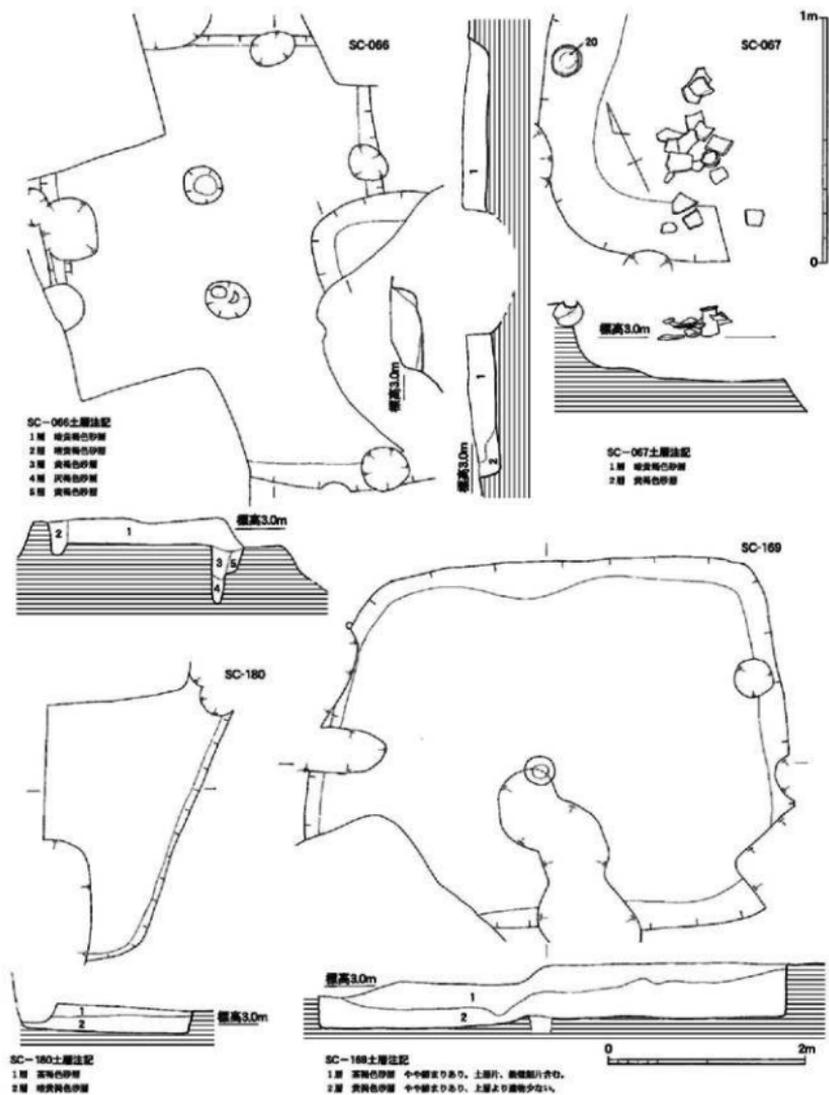


図19 16-A区竪穴住居跡及び遺物出土状況実測図 (縮尺 1/50, 1/20)



図20 SC-066 全景 (南から)



図21 SC-066 遺物出土状況 (東から)

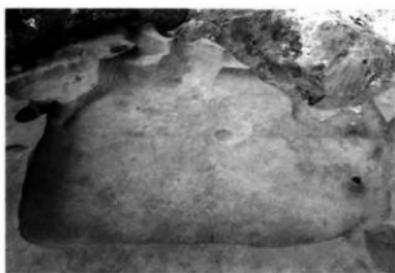


図22 SC-169 全景 (南から)



図23 SC-067 遺物出土状況 (東から)

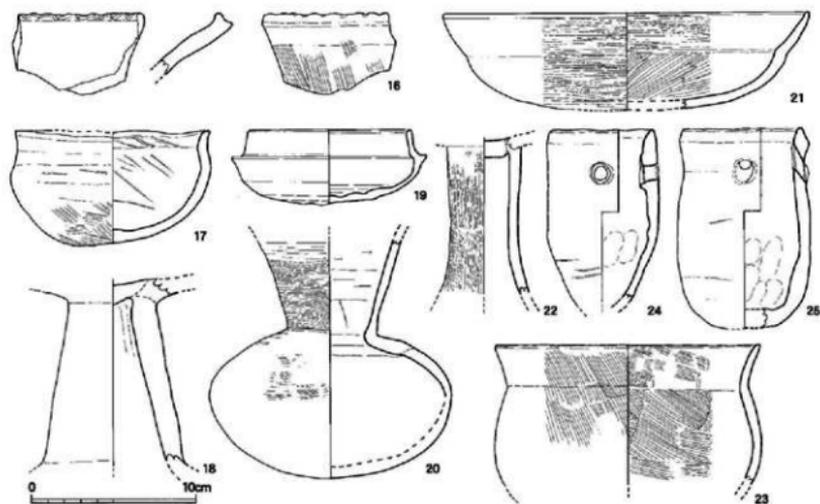


図24 16-A区竪穴住居跡他出土遺物実測図 (縮尺 1/3)

SC-067 (図19、23)

SC-067はB-5グリッドで検出された。隅角部分1箇所を検出したにすぎず、ほとんどが後世の遺構や攪乱に切られ、規模や形状は不明である。覆土には暗茶褐色砂が堆積しており、遺構検出面から約30cm下で床面部分を検出した。

出土遺物 (図23、21)

出土状況

古式土師器等が少量出土した。隅角付近の床面からやや浮いた位置で出土しており、住居跡の機能が終了してやや時間が経過した段階で廃棄されたものと推定される。なお、突帯文土器(16)も本住居跡内からの出土である。

古式土師器 (17、18)

17は口径11.8cm、器高7.0cm、頸部径11.4cm、胴部最大径12.0cmを測る鉢。口縁部は非常に短く外反する。体部は浅く頸部付近はやや内傾して口縁部に繋がる。胎土は精良で、色調は浅い赤みの橙褐色を呈す。18は高杯の脚部片。

SC-169 (図19、22)

SC-169はA-1、B-1グリッドに跨って検出された。後世の遺構や攪乱に切られるが、遺存状況は比較的良好といえ、長辺4.8m、短辺3.7mのやや不整形な隅丸長方形を呈する。覆土には暗茶褐色砂が堆積しており、遺構検出面から約55cm下で床面を検出した。床面の占有面積は、17.8㎡と推測される。床面からビット数個を検出したが、主柱穴は不明である。

遺物としては、覆土から古式土師器片が数点出土したが、図化に耐えうる遺物はない。

SC-180 (図19)

SC-180はB-1、2グリッドに跨って検出された。隅角付近の一部を検出したにすぎず、ほとんどは調査区外に延びる。また切りあい関係が判然としなが、恐らくSC-169に後出するものと考えられる。規模や形状は不明で、覆土には暗茶褐色砂が堆積しており、遺構検出面から約20cm下で床面部分を検出した。

遺物としては、覆土から古式土師器片数点があるが、図化に耐えうる遺物はない。

(2) 井戸

調査区内で井戸は4基が確認された。いずれも調査区の中央部付近に集中している。

SE-092 (図26、29)

SE-092は、A-2、3グリッドで検出した。東半が調査区外に延び、SE-148を切る。検出面での掘り方は、直径4.8mの円形もしくは楕円形を呈すると考えられる。掘り方はやや緩やかな傾斜をもって掘削され、数箇所足場を確保するための段が土層断面から観察された。底部では直径65cmの井筒と考えられる木質腐食部を確認した。底部の標高は0.65mを測る。

出土遺物 (図30)

覆土から土師器、龍泉窯系青磁、同安窯系青磁、白磁、褐釉陶器、瓦片などが出土した。

26~28は底部篋切りの土師器皿。26は口径11.0cm、器高2.2cmを測る。胎土は精良で、色調は明るい灰みの橙褐色を呈す。27は口径11.1cm、器高2.9cmを測る。胎土は精良で、色調は明橙褐色を呈す。28は口径11.0cm、器高2.8cmを測る。胎土は精良で、色調は浅い橙褐色を呈す。29は青磁碗の口縁部片で、口径11.6cmに復元される。体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁部に明瞭な段が付き、端部は短く外反する。胎土は精良で白色細粒を含む。色調は青みの明灰色を呈す。このほか図示していないが、龍泉窯系および同安窯系の碗小片が出土している。30は土師器の高台付皿で、口径12.4cm、器高2.1cm、底径8.8cmを測る。口縁部は僅かに上向きに直線的に外方に延びる。胎土は精良で、色調は薄い橙褐色を呈す。31は土師器の高台付杯で、口径14.8cm、器高5.0cm、底径8.6cmを測る。胎土は精良で、色調は浅い橙褐色を呈す。32は白磁口禿碗の口縁部片で、口径16.4cmに復元される。胎土に黒色細粒を含み、色調は青みの白色を呈す。33は白磁碗の口縁部片で、口径17.0cmに復元される。胎土は精良で、色調は明灰色を呈す。34は褐釉陶器四耳壺の肩部小片。胎土は精良で、白色や黒色の細粒を含む。色調は、黄みの明灰色を呈す。35~41は平瓦片で、布目と格子目タタキがみられる。



図25 SE-093 全景 (西から)

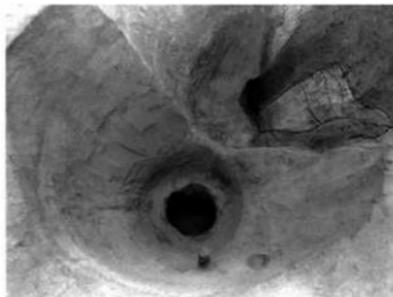


図26 SE-092, 148 全景 (南から)



図27 SE-139 全景 (西から)

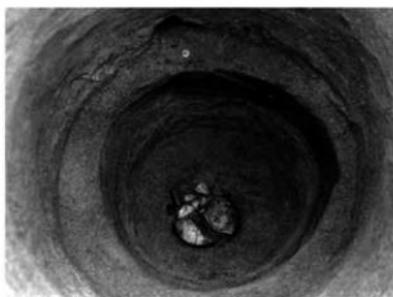


図28 SE-139 遺物出土状況 (南から)

37は押圧文の軒平瓦片である。42は瓦片を利用した釜打で、直径2.4～2.6cmを測る。

SE-093 (図25、29)

SE-093は、B-3グリッドで検出した。攪乱に切られている。検出面での掘り方は、直径3.5mの不整形な円形を呈する。検出面から深さ約1.7m(標高約0.95m)の箇所、井筒を据えるため、直径1.6～1.7m程度のやや不整形な楕円形の平坦面を設ける。井筒は一辺が65cm程度の方形を呈し、底部まで達していた。底部の標高は約0.6mを測る。

出土遺物 (図31)

覆土から土師器、越州窯系青磁(碗)、龍泉窯系青磁片、同安窯系青磁片、白磁(碗、皿)、陶器、平瓦片、漁鎌などが出土している。

66は青磁皿で、口径10.4cmに復元される。胎土は精良で、色調は薄い黄みの明灰色を呈す。67、

68は底部鋭切りの土師器皿。67は口径9.8cm、器高1.2cmを測る。胎土は精良で、色調は浅い橙褐色を呈す。68は口径10.6cm、器高1.9cmを測る。胎土は精良で、色調は浅い橙褐色を呈す。69、70は高台付皿。69は口径11.6cm、器高2.4cm、底径7.0cmを測る。体部は直線的にやや上向きで外方に延びる。胎土は精良で、色調は薄い黄橙褐色を呈す。70は口径12.7cm、器高2.4cm、底径8.1cmに復元される。体部は直線的に外方に延び、端部がやや上向きである。胎土は精良で、色調は薄い橙褐色を呈す。71は高台付杯の底部片で、底径7.1cmを測る。胎土は精良で、色調は薄い黄橙褐色を呈す。72は白磁小碗で、口径9.7cm、器高2.7cm、底径4.2cmに復元される。高台は非常に短く削り出される。胎土は精良で、色調は薄い黄みの明灰色を呈す。73は白磁碗の底部片で、底径6.6cmに復元される。74は越州窯系青磁碗で口径

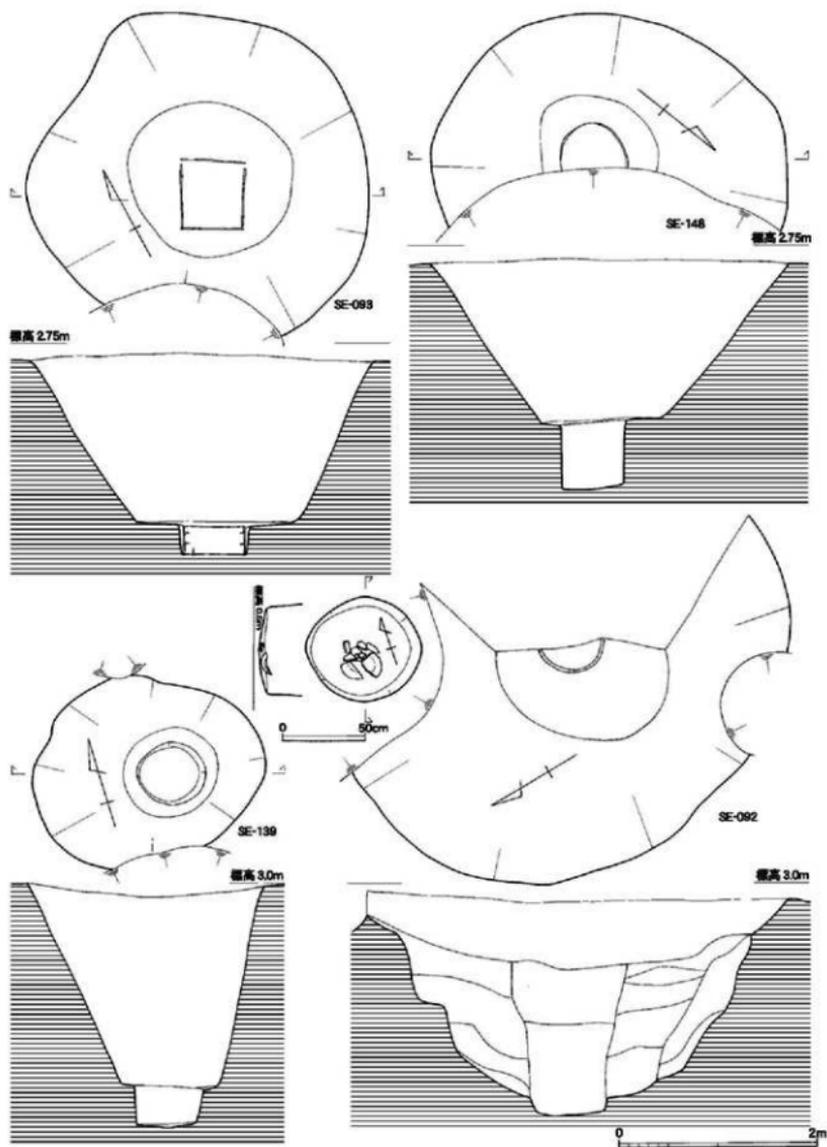


图 29 16-A区井戸及び遺物出土状況実測図（縮尺 1/50、1/20）

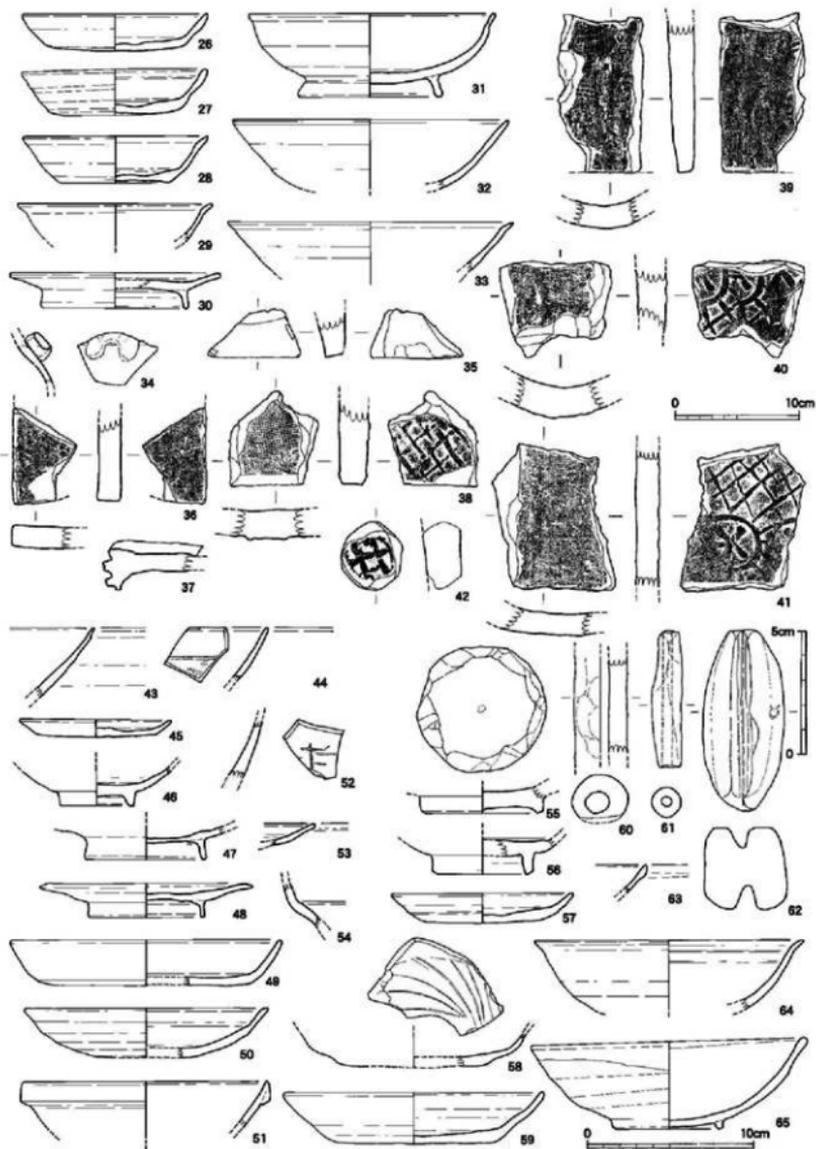


図30 SE-092、139、148 井戸出土遺物実測図 (縮尺 1/2、1/3、1/4)

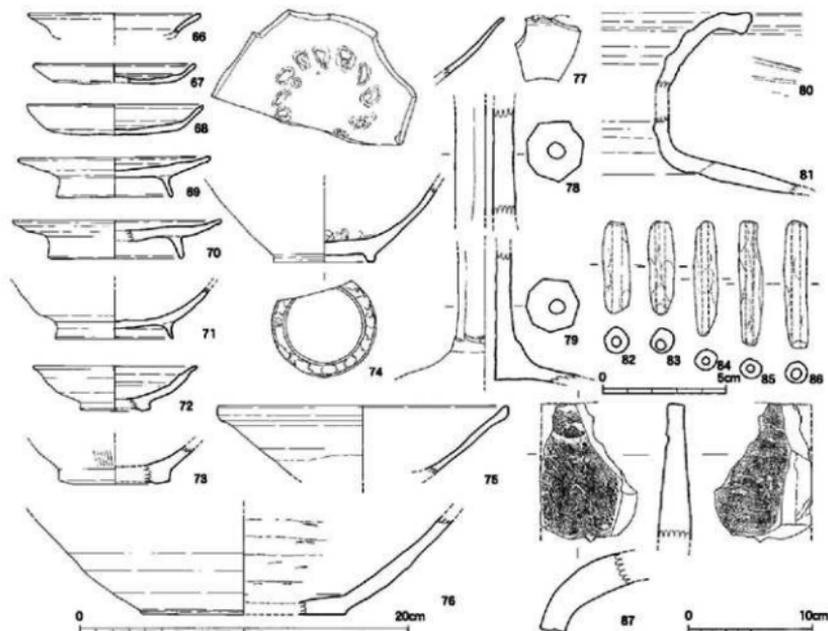


図31 SE-093 井戸出土遺物実測図 (縮尺 1/2、1/3、1/4)

部が欠損する。底径は6.2cmを測る。底部高台は短く削り出される。見込みと畳付に白色耐火土の目跡が残る。胎土は精良で、色調は黄みの明灰色を呈す。75は白磁碗の口縁部片で、口径17.5cmに復元される。口縁部は玉縁。胎土は精良で黒色細粒を含む。色調は明るい灰色を呈す。76は須恵質土器甕の底部片で、底径12.6cmに復元される。胎土はやや粗く、白色粗砂を含む。焼成は良好で、色調は暗灰色～明灰色を呈す。内器面に煤が付着する。77は白磁碗の口縁部小片で、輪花である。胎土は精良で、器壁は薄い。色調は黄みの白色を呈す。78、79は土師器器台の脚部片。両者とも器面が粗く面取りされ、断面の形状が八角形を呈す。胎土は概ね精良で、色調は薄い黄みの橙褐色を呈す。79は脚底部が大きく外方に開く。80、81は須恵質土器甕の小片。80は口縁部片で、喇叭状に口縁部が開き、端部はやや下方に肥厚する。81は

肩部～頸部にかけての破片。両者とも胎土は概ね精良で、色調は青みの明灰色を呈す。同一個体と考えられるが接合しない。高麗陶器の可能性も考えられる。82～86は土製漁鎌で、長さは順に3.7cm、3.7cm、4.6cm、5.0cm、5.1cmを測る。いずれも胎土は概ね精良で、直径0.3～0.4cmの孔が貫通する。87は丸瓦片で、内器面に布目痕、外器面にはナデ調整を施す。

SE-139 (図28、29)

SE-139は、B-2グリッドで検出した。攪乱に切られる。検出面での掘り方は、直径1.9～2.4mの不整形な楕円形を呈する。検出面から深さ約2.0m(標高約0.95m)の箇所、井筒を掘るため直径0.9～1.0m程度の楕円形の平坦面を設ける。井筒を掘るための掘り込みは、直径0.6～0.7mを測る楕円形を呈する。井筒の痕跡は確認されなかったが、円形の結物桶を使用していたものと

推定される。底部の標高は0.5mを測る。

出土遺物(図30)

井戸の底部から瓦器碗(65)のほか、井戸枠の裏込めから土師器杯(59)が出土した。また、覆土から土師器、龍泉窯系青磁、同安窯系青磁、白磁、褐釉陶器、瓦片等が出土した。

55は底径7.2cmの白磁碗底部を利用した埴打で、直径7.7cm。胎土は精良で、色調は緑みの白色を呈す。56は白磁碗の底部片で、底径6.0cm。胎土は概ね精良で、色調は緑みの白。57は底部篋切りの土師器皿で、口径10.8cm、器高1.8cm。胎土は精良で、色調は明るい灰みの橙褐色を呈す。58は土師器杯の底部片で、底径9.0cmに復元される。見込みに暗文が確認される。59は底部糸切りの土師器杯で、口径17.5cm、器高3.0cm。胎土は精良で、色調は薄い黄みの橙褐色。60は土師器器台の脚部片で、外器面に指頭丘が施され、断面の形状は円形を呈す。61、62は土製漁鍾である。61は長さ5.5cmを測り、径0.4cmの孔があく。62は長さ7.4cm、幅3.55cm、厚さ3.3cmを測り、平面形は端部が丸みを帯びた菱形を呈し、両側面に溝が彫られる。63は白磁碗の口縁部小片で、玉縁口縁である。胎土は概ね精良で、色調は明灰色を呈す。64は白磁碗片で、復元口径16.0cm。胎土は概ね精良で、色調は黄みの明灰色を呈す。65は瓦器碗で、口径16.4cm、器高6.5cm、底径6.6cm。胎土は概ね精良で、白色細砂を含む。焼成は良好で、色調は明灰色を呈す。

SE-148(図26、29)

SE-148は、A-3、B-3グリッドに跨って検出された。SE-092に切られる。検出面での掘り方は、長径3.6mを測る不整形な楕円形を呈するものと推定される。検出面から深さ約1.7m(標高約1.0m)の箇所、井筒を掘るため、直径1.1~1.3m程度の楕円形を呈する平坦面を設けている。井筒を掘るための掘り込みは、直径0.6~0.7mを測る不整形な楕円形を呈する。井筒の痕跡は確認されなかったが、円形の結物桶を使用していたものと推定される。底部の標高は0.25mを測る。

出土遺物(図30)

覆土から土師器、龍泉窯系青磁、同安窯系青磁、白磁、褐釉陶器、瓦片などが出土した。

43は白磁碗の口縁部小片で、胎土は精良、色調は黄みの白色を呈す。44は同安窯系青磁碗の口縁部小片で、胎土は精良、色調は明るい灰みの黄色を呈す。45は底部糸切りの土師器皿で、口径9.0cm、器高1.1cmを測る。胎土は精良で、色調は明るい灰みの橙褐色を呈す。46は青磁碗の底部片で、底径4.4cmを測る。胎土は精良で、色調は灰みの黄橙褐色を呈す。見込みに目跡が確認できる。47は土師器高台付杯の底部片で、底径7.2cmを測る。胎土は精良で、色調は明橙褐色を呈す。48は高台付皿で、口径12.7cm、器高2.0cm、底径7.2cmを測る。体部は平たく外方に延びる。胎土は精良で、色調は薄い黄橙褐色。49は底部糸切りの土師器杯で、口径16.2cm、器高2.8cmに復元される。胎土精良で、色調は浅い橙褐色。50は底部篋切りの土師器杯で、口径14.6cm、器高3.0cmに復元される。胎土は精良で、色調は薄い黄橙褐色を呈す。51は玉縁口縁の白磁碗片で、口径14.5cmに復元される。色調は緑みの白色を呈す。52は陶器片。53は青磁皿の口縁部片で、色調は明るい灰みの黄色を呈す。54は褐釉陶器壺の肩部片で、色調は黄みの明灰色を呈す。

(3) その他の遺物(図24)

出土遺物から古墳時代と考えられる土壌SK-160から竈遺2点が出土した。24は口径7.1cm、器高12.1cm。底部は丸底で、体部は僅かに内傾しながら立ち上がる。口縁部はやや外反し、端部はやや尖り気味である。口縁部直下はやや凹み頭部状を呈し、内器面から外器面に向かって1ヶ所穿孔される。胎土は概ね精良で、色調は浅い橙褐色を呈す。25は口径6.1cm、残存高10.8cm。底部は欠損するがやや尖り気味と考えられる。体部は僅かに内傾しながら立ち上がり、そのまま口縁部へと繋がる。口縁部はやや尖る。体部上方に外器面から内器面に向かって1ヶ所穿孔される。胎土は概ね精良で、色調は浅い橙褐色を呈す。

2. 16-B区の記録

(1) 概要

16-B区は、東区箱崎1丁目4番地内に位置する。箱崎区画整理事業地内の発掘調査区のうち北側に位置し、平成12年に発掘調査が行われた20次調査2区の北側に隣接している。16-A区とは20m程度離れているが、この間は区画整理後も既存建物が残るため発掘調査が行われなかった。調査前の現況は、専用住宅や共同住宅および店舗などを解体した後の更地で、高架になる以前のJR鹿兒島本線線路が東側に隣接していた。16-B区の調査面積は、776㎡ある。

調査区の北側を中心に数カ所の攪乱があったが

遺構の遺存状態は比較的良好であった。

調査区の基本層序は、表土及び攪乱層(1層)、黒褐色砂質土層(2層)、黒褐色砂質土層(3層)、明褐色砂質土層(4層)が堆積する。その下に砂丘基盤である黄褐色砂が堆積する。砂丘面の標高は、北端部で3.2m、南端部で3.5m程度であり、南から北に向かって緩やかに傾斜している。

検出した遺構は、弥生時代後期、古墳時代中期、中世に大別される。弥生時代後期の遺構には、甕棺墓1基がある。古墳時代中期の遺構には竪穴住居跡3棟を検出した。これらの遺構群は、大部分が後世の遺構や攪乱で破壊されており、遺存状況は良好でない。出土遺物には弥生土器甕、古式土師器(壺、甕、小型丸底壺、小型塔、高坏)、須



図32 16-B区全景(北から)

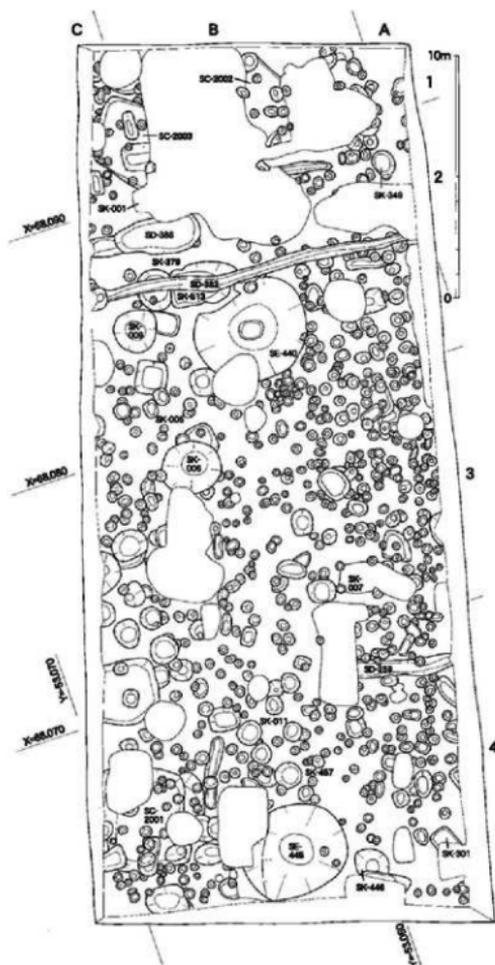


図33 16-B区遺構配置図(縮尺1/200)

恵器(坏身、坏蓋)などの土器類のほか、滑石製玉類(白玉、勾玉)や剣先形滑石製品などがある。また、住居跡内の覆土を磁洗したところ、一定量の鉄片を検出することができた。

中世の遺構としては、井戸、土壕、溝、ピットなどがある。箱崎遺跡の他の調査区と比較すると遺構密度が非常に薄い。出土遺物は土師器(皿、坏、高台付皿、高台付坏)、土師質土器(厨台)、瓦器(碗)、中国産白磁(碗、皿、壺)、越州窯系青磁(碗)、龍泉窯系青磁(碗、皿)、同安窯系青磁(碗、皿)中国産陶器(壺)、瓦(丸瓦、平瓦)、土製籠、土製漁籠などで、総量はコンテナケース40箱である。

(2) 変棺墓

ST-2005(図34、41、42)

ST-2005は、B-1グリッドで検出した弥生時代後期初頭の変棺墓である。周辺が大きく攪乱され下甕が遺存するのみである。主軸方位はW-77°-Sをとり、埋葬角度は15°を測る。

88はST-2005変棺墓の下甕で、口径28.5cm、器高33.7cm、底径8.6cmを測る。外器面に縦方向の刷毛目を施す。胎土は粗く、色調は明るい灰みの橙褐色を呈す。

(3) 竪穴住居跡

調査区内で竪穴住居跡は3棟が確認された。そのうちの1棟は、住居跡のごく一部を検出したに過ぎないが、出土遺物と形状から竪穴住居跡と推定される。

SC-2001(図34~38)

SC-2001はC-4、5グリッドに跨って検出された。後世の遺構や攪乱に切られるが、遺存状況は比較的良好といえ、長辺4.1m×短辺3.3mを測る剛丸長方形を呈する。覆土は、上から順に暗茶褐色砂(1層)、暗黄褐色砂(2層)、暗茶褐色砂(3層)が堆積しており、遺構検出面から約30cm下で床面を検出した。床面の占有面積は、13.5㎡と推測される。床面からピット数個を検出したが、主柱穴は不明である。

出土遺物 (図 43)

出土状況 (図 34, 36~38)

住居跡の床面直上付近から出土した遺物と、やや浮いた状態で出土した2群に分けられる。前者には、滑石製玉類(勾玉、白玉、剣先形石製品)などにくわえ、古式土師器片などがある。後者には古式土師器の甕などがあり、3層上面付近から出土しており、住居が廃棄された後に投棄されたものと推定される。

滑石製品

白 玉 (89, 90, 92~97)

89, 90は破片。92は直径0.41cm、厚さ0.2cmを測る。93は直径0.45cm、厚さ0.15cmを測る。94は直径0.5cm、厚さ0.18cmを測る。95は直径0.5cm、厚さ0.2cmを測る。96は直径0.5cm、厚さ0.3cmを測る。97は直径0.55cm、厚さ0.31cmを測る。89, 90, 92, 93, 96は3層から出土した。他は、住居跡内の覆土を水洗して検出された。

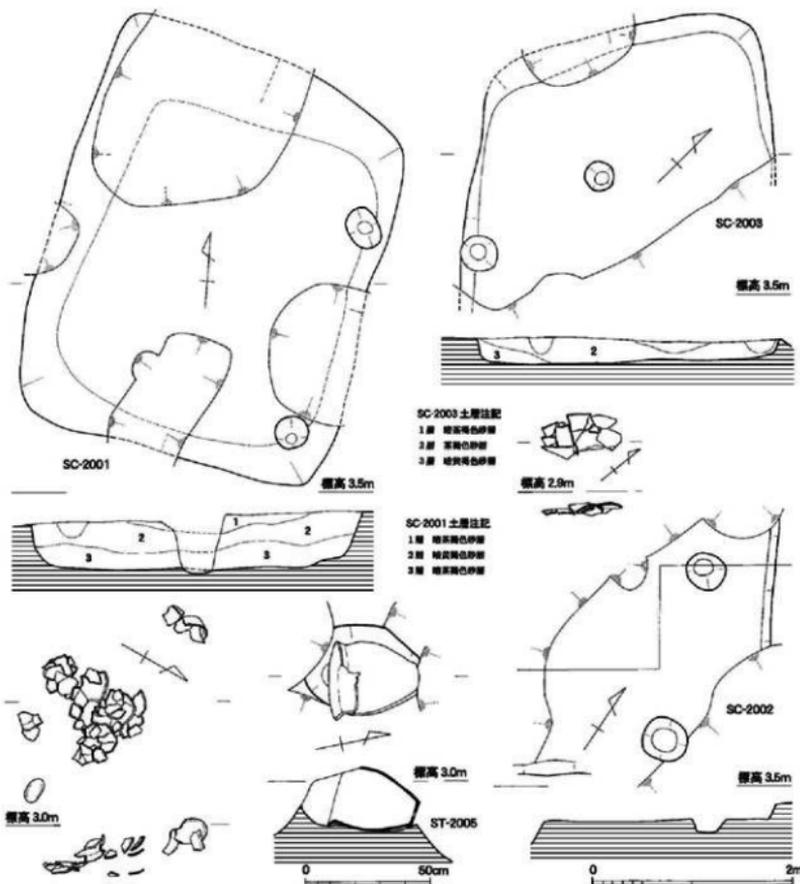


図 34 16-B区竪穴住居跡及び雙棺墓実測図 (縮尺 1/50, 1/20)

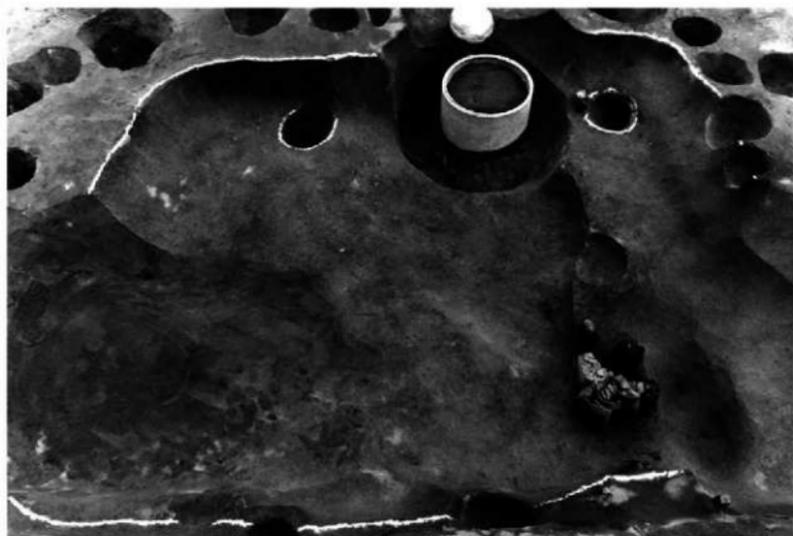


図35 SC-2001 全景 (西から)



図36 剣先形石製品出土状況(西から) 図37 勾玉出土状況(北から) 図38 SC-2001 土器出土状況(南から)



図39 SC-2002 全景 (北東から)



図40 SC-2003全景(西から)



図41 ST-2005検出状況(東から)

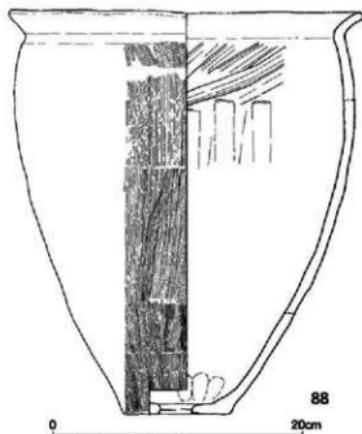


図42 ST-2005変実測図(縮尺1/4)

勾玉 (98)

98は高さ3.5cm、厚さ0.9cmを測る。穿孔は片側から行われ、孔径は0.2cmを測る。丁寧な研磨痕が確認できる。床面直上から出土した。

剣先形石製品 (99)

99は高さ3.9cm、厚さ0.6cmを測る。基部に直径0.3cmの穿孔が行われる。研磨は不整方向に行われる。床面直上から出土した。

このほか、100の剣先形滑石製品は攪乱から出土しており、高さ6.7cm、幅1.95cm、厚さ0.45cmを測る。基部に直径0.2cmの穿孔がある。研磨は不整方向に行われ、刃部を研ぎ出す。

ガラス製小玉

91は直径0.22cm、厚さ0.25cmを測る。引き伸ばし技法で製作される。色調は、明るい青緑色を呈す。覆土3層から出土した。

須恵器

坏蓋 (101, 102)

101は口径11.9cm、器高4.0cmに還元される。口縁部にやや鈍い段が付く。外器面の天井部約2/3に回転篋削りを施す。焼成は良好で、胎土はやや粗く、白色粗砂を含む。色調は、灰色を呈す。102は口径13.2cm、器高4.8cmに還元される。口縁部にやや鈍い段が付く。外器面の天井部約2/3に回転篋削りを施す。焼成は良好で、胎土は概ね精良である。色調は、灰色を呈す。

坏身 (103)

103は口径11.0cm、器高4.8cm、受部径13.0cmに還元される。口縁部は内傾気味にやや長く立ち上がり、端部に明瞭な段がある。外器面の底部約2/3に回転篋削りを施す。胎土は精良で、白色細砂を含む。焼成良好で、色調は灰色を呈す。

古式土師器

鉢 (104～106)

104は口径13.5cmに還元される。口縁部は内湾し、外器面に細かい篋磨きが施される。胎土は概ね精良で、白色細砂を僅かに含む。105は口径12.4cm、器高5.75cm、胴部最大径13.6cmを測る。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は更に内傾する。外器面には回転ナデ調整の後、手持ち

篋削りを施し、篋磨き調整を加える。胎土はやや粗く、白色砂粒を多く含む。焼成は良好で、色調は橙褐色～明赤褐色を呈す。106は口径13.4cm、器高6.0cm、胴部最大径13.1cmを測る。体部は僅かに内湾気味に立ち上がり、口縁部は短く外反する。外器面には回転ナデ調整の後、手持ち篋削りを施し、篋磨き調整を加える。胎土はやや粗く、白色砂粒を多く含む。焼成は良好で、色調は橙褐色。底部に篋記号状の文様が篋描きされる。

高坏 (107, 108)

107は高坏の坏部で、口径15.4cmを測る。口縁部は広く外反する。内・外器面ともに回転ナデ調整し、更に細かい篋磨きを施す。外器面には赤色顔料の痕跡が残る。胎土に白色細砂を含み、焼成は良好、色調は赤褐色を呈す。脚部とは接合面内で離れている。108は坏底部の小片である。

深鉢 (109)

109は口径11.5cmに還元される深鉢と考えられる小片である。口縁部はやや外反する。外器面に縦方向の刷毛目調整を施し、口縁部はナデ消す。胎土に白色・黒色細砂を含み、焼成は良好、色調は赤褐色を呈す。

壺 (110～112)

110は口径16.0cmに還元される。口縁部は短く外反する。胴部外器面に縦方向の刷毛目を施し、内器面には手持ち篋削りで器壁を薄くする。胎土は粗く、白色粗砂を多く含む。焼成は良好で、色調はにぶい黄褐色から灰黄褐色を呈す。111は口径12.0cmに還元される。口縁部は直線的に外反する。胴部外器面に縦方向の刷毛目を施し、内器面には手持ち篋削りで器壁を薄くする。胎土はやや粗く、白色砂粒を含む。焼成は良好で、色調は明赤褐色を呈す。112は口径11.9cm、器高22.4cm、胴部最大径19.5cmを測る。口縁部は短く外反し、胴部はやや長い球形を呈し、底部は丸底である。胴部外器面に粗い縦方向の刷毛目を施し、内器面には手持ち篋削りで器壁を薄くしている。胎土は概ね精良で、焼成は良好である。

小壺 (117)

117は胴部最大径10.8cmに還元される。外器

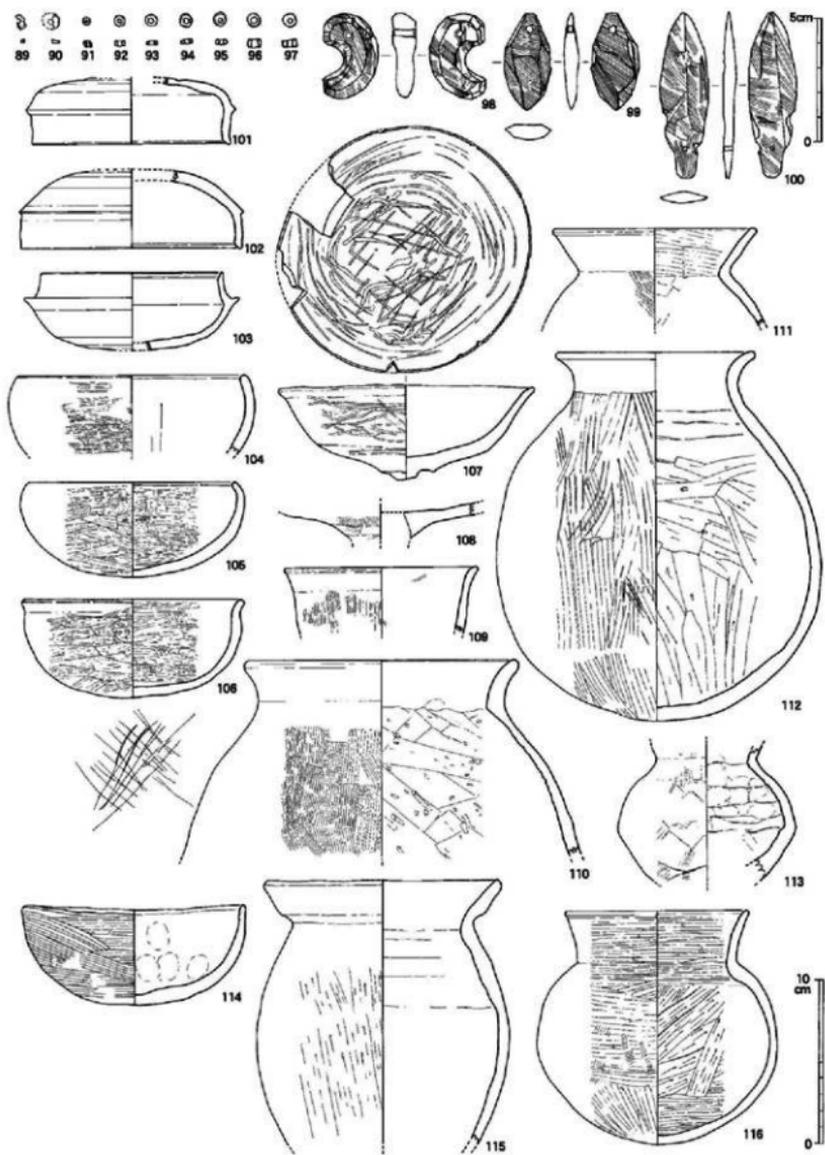


图43 16-B区竖穴住居跡他出土遺物実測図(縮尺1/2、1/3)

面には手持ち筥削りを施した後に筥磨きを施す。内器面には、粘土紐の接合痕にあわせて指頭圧痕がみられる。胎土は概ね精良で、焼成は良好。色調はにぶい黄褐色を呈す。

SC-2002 (図34、39)

SC-2002は、B-1グリッドで検出された。2辺の一部と床面を僅かに検出したにすぎず、ほとんどが後世の遺構や攪乱に切られ、規模や形状は全く不明である。遺構検出面から約15cm下で床面を検出した。

出土遺物には、古式土師器片などが僅かにあるが図化に耐えない。

SC-2003 (図34、40)

SC-2003はB-1、C-1グリッドに跨って検出された。後世の遺構や攪乱に切られ、約半分を留めるものと推定される。平面形は、短辺が2.9m測るやや不整形な隅丸長方形を呈するものと推定される。覆土は上から順に暗茶褐色砂、茶褐色砂層、暗黄褐色砂が堆積しており、遺構検出面から約25cm下で床面を検出した。床面からピット数個を検出したが、支柱穴は不明である。

出土遺物 (図43)

出土状況 (図34)

床面直上から、古式土師器(坏、甕)や黒色磨研土器小壺などが出土した。

古式土師器

鉢 (104~106)

114は口径13.5cm、器高6.1cmを測る。体部は上方へ立ち上がる。外器面に刷毛目、内器面に指頭圧痕がある。胎土は精良で、色調は、明るい灰みの橙褐色を呈する。

甕 (115)

115は口径14.4cm、胴部最大径15.2cmを測る。口縁部は短く外反する。胎土は粗く、白色粗砂を多く含む。焼成は良好で、色調はにぶい黄褐色から灰黄褐色を呈する。

黒色磨研土器

小壺 (116)

116は口径11.0cm、器高14.2cm、胴部最大径14.5cmを測る。口縁部は直線的に外反し、胴部

は球形を呈する。底部は丸底である。口縁部の内器面から外器面にかけて筥磨き調整、胴部内器面には手持ち筥削りを施し、器壁を薄くしている。胎土は精良で、色調は黒褐色を呈す。

(4) 井戸

調査区内で井戸は2基が確認された。他の調査区と比較すると井戸の数が少ない。

SE-440 (図44、45)

SE-440は、B-2、C-2グリッドに跨って検出された。攪乱や土壌に切られる。検出面での掘り方は、長径4.7m、短径4.1mを測る楕円形を呈する。掘り方は、やや急傾斜に掘削される。検出面から深さ約2.7m(標高約0.45m)の箇所、井筒を掘るため、直径2.0m程度の不整形な円形を呈する平坦面を設けている。井筒を掘るための掘り込みは、直径0.8~1.0mを測る不整形な楕円形を呈する。井筒の痕跡は確認されなかった。底部の標高は0.2mを測る。

出土遺物 (図46)

覆土から土師器、越州窯系青磁、龍泉窯系青磁、同安窯系青磁、白磁、褐釉陶器、瓦(平瓦、丸瓦)瓦製碇打、漁籠、不明土製品などが出土した。

117~120は底部回転糸切りの土師器皿である。いずれも胎土は概ね精良で、色調は灰白色~にぶい橙褐色を呈する。117は口径8.1cm、器高1.0cm、118は口径8.2cm、器高1.0cm、119は口径9.4cm、器高1.1cmに復元される。120は口径8.7cm、器高1.0cm、121は白磁皿で、口径9.9cm、器高2.5cm、底径4.2cmに復元される。胎土は精良で、色調は灰白色を呈する。122は白磁皿で、口径10.2cm、器高2.8cm、底径3.8cmに復元される。胎土は精良で、色調は灰白色を呈する。123は白磁皿で、口径10.8cm、器高3.5cm、底径2.8cmに復元される。胎土は精良で、色調は灰白色を呈する。124は同安窯系青磁碗の底部片で、底径6.2cmを測る。胎土に白色・黒色細粒を含み、色調は浅黄色を呈する。125は龍泉窯系青磁碗で、底径5.4cmを測る。胎土に白色細粒を含み、色調は灰白色を呈す。126は土師器坏の口縁部片で、口径15.4cmに復

元される。胎土に白色粗砂を含み、色調はにぶい橙褐色を呈す。127は白磁碗の口縁部片で、口径16.0cmに復元される。胎土は精良で黒色細粒を含み、色調は灰白色を呈す。128は土師器高台付環の底部片で、底径7.0cmを測る。胎土はやや粗く白色粗砂を多く含み、色調は明褐色を呈す。129は棒状の用途不明土製品で、残存長8.7cm、断面直径2.8cm。手握ねで成形され、外器面に指頭圧痕が確認される。端部の形状は尖り気味である。胎土は概ね精良で、色調はにぶい橙褐色を呈す。130は土師質土器器台の脚部片である。断面の形状は円形を呈し、直径3.6cm。胎土は精良で、色調は橙褐色を呈す。131は越州窯系青磁碗の体部小片で、胎土は概ね精良。色調は黄褐色を呈す。132は越州窯系青磁碗の底部片で、底径7.0cm。胎土は概ね精良で、白色や黒色の細粒を含む。見込み及び畳付に砂目跡が残る。色調は灰オリーブ色を呈す。133は中国産陶器鉢で、口径19.0cmに復元される。胎土はやや粗く、白色・黒色砂粒を含む。色調はにぶい赤褐色を呈す。134は白磁水注もしくは壺の底部片で、底径8.4cmに復元される。底部は篋で高台を削り出す。胎土は概ね精良で、黒色細粒を含む。色調は灰白色を呈す。135～138は瓦片を再利用した登打。幅は2.1cm～3.1cm、厚さは1.0cm～1.9cm。139は不明土製品で幅2.4cm、厚さ1.2cm。形状・断面ともに長方形を呈する。140は土製漁錐で、長さ5.25cm、幅1.3cm。141は底部篋切りと考えられる土師器環の口縁部片で、口径16.2cmに復元される。胎土は概ね精良で、色調はにぶい橙褐色を呈す。142～144は底部回転糸切りの土師器環。142は口径10.2cm、器高3.4cm。胎土は粗く、色調は橙褐色を呈す。143は口径15.8cm、器高3.0に復元される。胎土に白色砂粒を含み、色調はにぶい橙褐色を呈す。144は口径

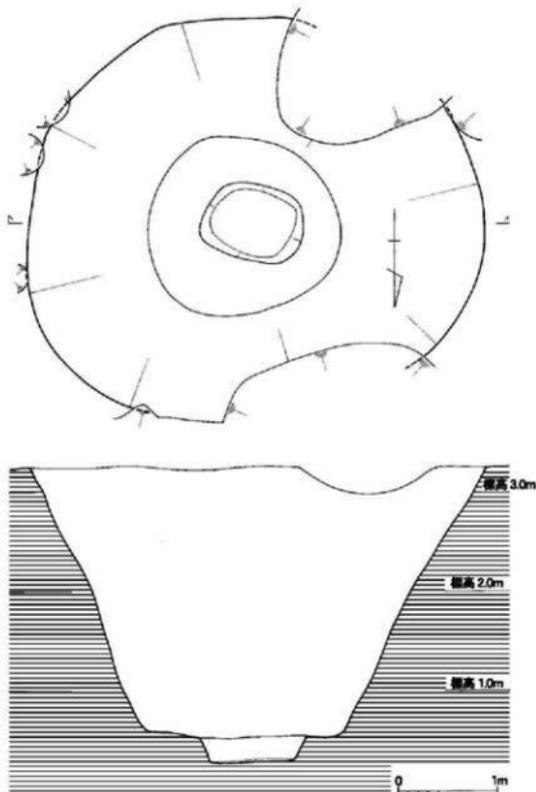


図44 SE-440実測図(縮尺1/50)



図45 SE-440全景(北から)

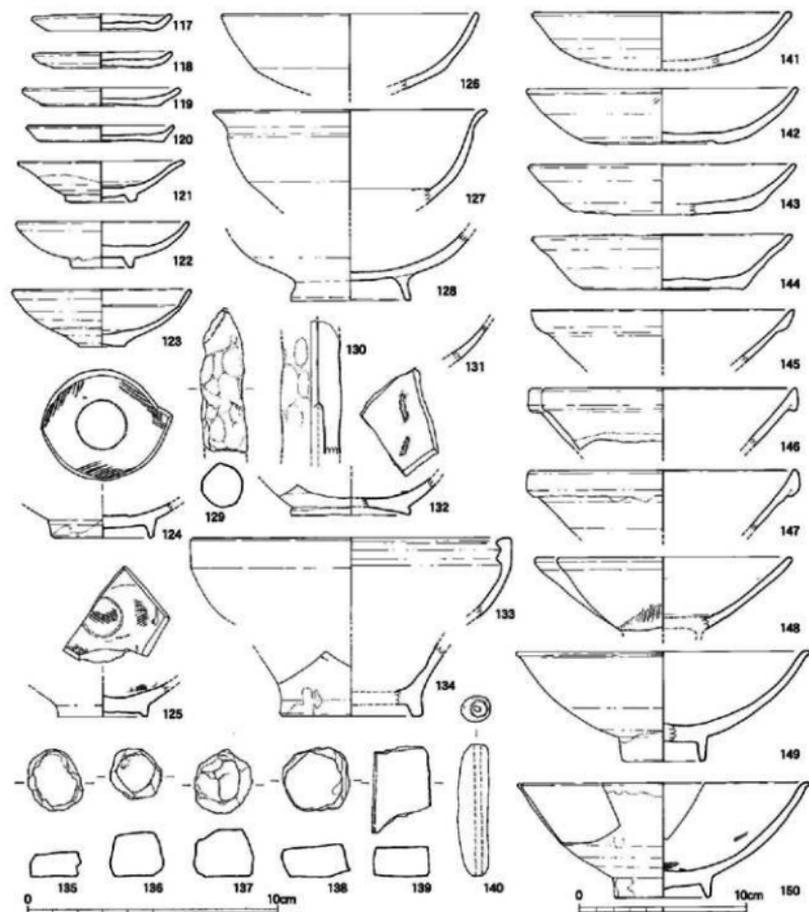


図46 SE-440出土遺物実測図(縮尺1/3、1/2)

15.5cm、器高3.4cm。胎土は精良で、色調は浅黄橙色を呈す。145～150は白磁碗である。145は口径15.8cmに復元される。玉縁口縁で、胎土は概ね精良。色調は灰白色を呈す。146は口径15.8cmに復元される。玉縁口縁で、胎土は概ね精良。色調は灰白色を呈す。147は口径16.0cmに復元される。玉縁口縁で、胎土は概ね精良。色調は灰白色を呈す。148は口径15.3cmに復元さ

れる。口縁部は直線的に外反する。胎土は概ね精良。色調は灰白色を呈す。149は口径17.5cm、器高6.7cm、底径3.0cmに復元される。口縁端部が外方に折れ曲がる。胎土は精良で、色調はにぶい黄橙色を呈す。150は口径17.4cm、器高7.0cm、底径2.8cmに復元される。口縁端部が外方に折れ曲がる。内器面に櫛描き波状文を施文。胎土は精良で、色調は灰白色を呈す。

SE-515 (図47、48)

SE-515は、C-4グリッドで検出された。攪乱やビットに切られる。検出面での掘り方は、長径4.35m、短径3.7mを測る楕円形を呈する。掘り方はやや急傾斜に掘削されると考えられる。検出面から約2.5m掘削した標高約0.6mで、底部を検出した。底部の形状は長径1.45m、短径1.2mを測る不整形な楕円形を呈する。井筒の痕跡は確認されなかった。

出土遺物 (図49)

覆土から土師器、黒色土器、白磁、瓦などの他、少なからず古式土師器や須恵器片などが出土しており、古墳時代の遺構を破壊して掘削された可能性が高いと考えられる。

151は底部回転系切りの土師器皿で、口径8.6cm、器高0.9cmを測る。胎土は概ね精良で、色調は薄い黄みの橙褐色を呈す。152～155は底部筒切りの土師器皿で、胎土は概ね精良、色調は浅い橙褐色を呈す。152は口径9.2cm、器高1.2cmを測る。153は口径10.0cm、器高1.6cmに復元される。154は口径9.6cm、器高1.3cmに復元される。155は口径10.0cm、器高1.5cmを測る。156、157は京都系土師器を模した底部筒切りの土師器皿で、胎土は精良、色調は薄い黄みの橙褐色を呈す。156は口径12.4cmに復元される。157は口径10.6cmに復元される。158は土師器高台付杯の底部片で、底径7.7cmを測る。胎土に細砂を含み、色調は明るい灰みの橙褐色を呈す。159～161は黒色土器碗の底部片。いずれも器面に磨きを施し、胎土は精良で、色調は暗灰色を呈す。159は底径7.6cmを測る。160は底径8.0cmを測る。161は底径8.6cmを測る。162、163は底部回転系切りの土師器杯で、胎土は概ね精良で、色調は薄い橙褐色を呈す。162は口径

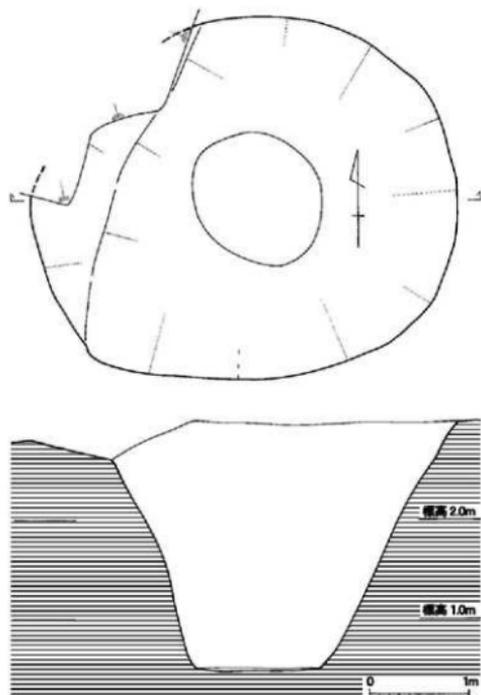


図47 SE-515実測図 (縮尺 1/50)



図48 SE-515全景 (南から)

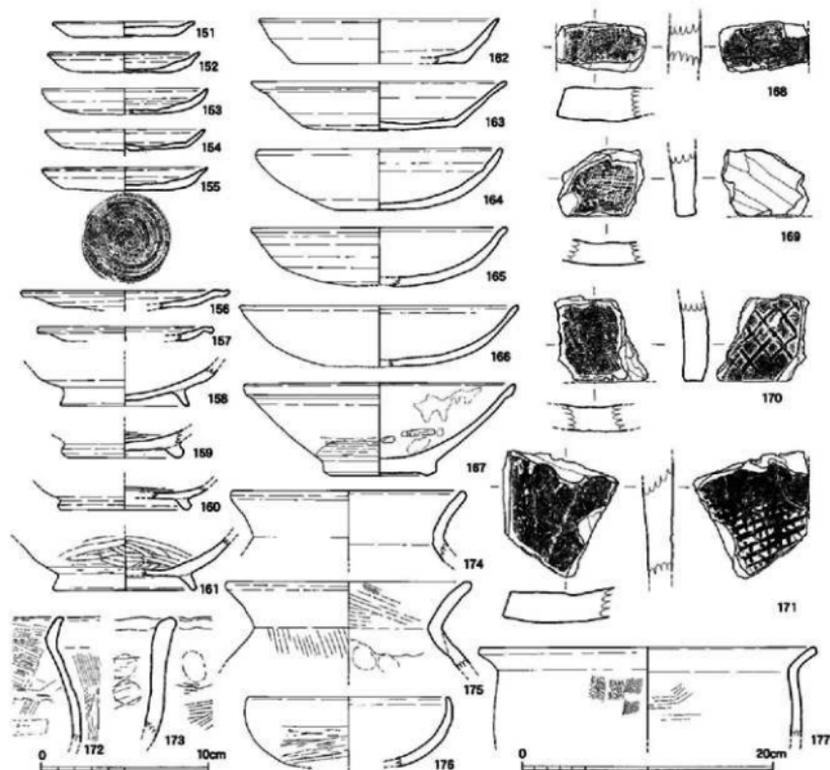


図49 SE-515出土遺物実測図(縮尺1/3、1/4)

14.5cm、器高2.7cmに復元される。163は口径15.4cm、器高3.0cmを測る。164～166は底部寛切りの土師器坏で、胎土は概ね精良、色調は浅い橙褐色～赤みの明灰色を呈す。164は口径14.8cm、器高3.7cmを測る。165は口径15.4cm、器高3.6cmに復元される。166は口径16.8cm、器高3.7cmに復元される。167は白磁碗で、口径16.3cm、器高5.7cm、底径6.6cmを測る。口縁部はやや小さい玉縁で、見込み付近に目跡が残る。胎土は概ね精良で、色調は緑みの白を呈す。168～171は平瓦片。布目痕と格子叩きが確認される。

172は古式土師器甕片。胴部外器面に縦方向の

刷毛目、内器面に不整方向の篋削りを施し、器壁を薄くする。胎土はやや粗く、色調は明るい灰みの橙褐色を呈す。174は口径14.2cmに復元される古式土師器甕の口縁部片で、胎土は概ね精良、色調は明るい橙褐色を呈す。175は口径14.8cmに復元される古式土師器甕の口縁部片で、胎土は概ね精良、色調は明るい橙褐色を呈す。176は古式土師器坏で、復元口径12.0cm。胎土は概ね精良で、色調は明るい橙褐色を呈す。177は古式土師器甕で、復元口径27.4cm。外器面に縦方向の刷毛目を施す。胎土はやや粗く、細砂を多く含む。色調はにぶい赤みの橙褐色を呈す。

(5) 土 壌

SK-001 (図50, 51)

SK-001は、B-2グリッドで検出された。攪乱が大きく切られる。検出面での掘り方は、一方の幅が1.0mを測り、隅丸方形もしくは長方形を呈すると推測される。掘り方は垂直に近く急傾斜に掘削される。検出面からの深さは約1.0mを測る。覆土は、黒褐色有機質腐食土層と、青灰色砂質土層が互層状に堆積することから、廃棄土壌と考えられる。

出土遺物 (図51)

覆土から底部回転系切りの土師器(皿、杯)が多く出土したほか、同安窯系青磁皿、白磁碗の小片などが少量出土した。

178～182は底部回転系切りの土師器皿である。いずれも胎土は概ね精良で、色調は浅い橙褐色～橙灰褐色を呈す。178は口径9.2cm、器高1.5cmに復元。179は口径9.6cm、器高1.2cm。180は口径10.8cm、器高1.4cm。181は口径9.6cm、器高1.7cm。182は口径9.4cm、器高1.0cm。183は同安窯系青磁皿の小片である。胎土は概ね精良、色調は黄みの明灰色。183は白磁碗の小片。胎土は概ね精良、色調は黄みの白色。185～193は底部回転系切りの土師器杯。185は口径15.0cm、器高3.0cm。胎土は概ね精良で、色調は明るい橙褐色。186は口径14.8cm、器高2.8cm。胎土は概ね精良で、色調は浅い橙褐色。187は口径15.2cm、器高3.2cm。胎土に白色細砂を少量含む。色調は浅い橙灰褐色。188は口径15.0cm、器高2.8cm。胎土は概ね精良で、色調は浅い橙褐色。189は底部片で、底径11.2cm。190は口径15.2cm、器高2.8cm。胎土はやや粗く、色調は明るい橙褐色。191は口径15.8cm、器高2.9cm。胎土は概ね精良で、色調は浅い橙褐色。192は口径16.1cm、器高3.0cm。胎土はやや粗く、粗砂を少量含む。色調は浅い橙褐色。193は口径16.4cm、器高3.0cm。胎土は概ね精良で、色調は浅い橙褐色。

SK-004 (図51, 60)

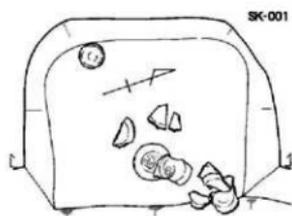
SK-004は、B-2グリッドで検出した。他の遺構や攪乱との切り合い関係はない。検出面での

掘り方は、長径0.9m、短径0.7mを測る不整形な楕円形を呈する。検出面からの深さは約0.25mと浅いが、遺物の出土状況から検出時に上面を大きく削平しており、掘り込みは砂層面からではなく、その上層から行われたものと判断される。

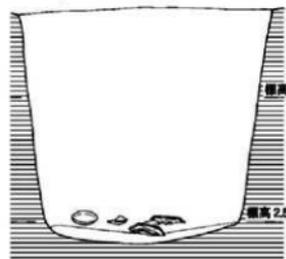
出土遺物 (図51)

覆土からの出土遺物は、底部篋切りの土師器(皿、杯)が主体で、この他青磁碗等が少量出土した。

194～204は土師器皿で、195のみ底部回転系切り、他は篋切りである。194は口径9.6cm、器高1.3cmに復元される。胎土は精良で、色調は明るい橙褐色。195は口径8.9cm、器高1.3cmを測る完形品。胎土は精良で、色調は浅い橙褐色。196は口径9.2cm、器高1.5cmを測る完形品。胎土は概ね精良で、色調は浅い黄みの橙褐色。197は口径9.2cm、器高1.0cm。胎土は概ね精良で、色調は明るい橙褐色。198は口径9.6cm、器高1.0cm。胎土は概ね精良で、色調は明るい橙褐色。199は口径9.6cm、器高1.0cm。胎土は概ね精良で、色調は明るい橙褐色。200は口径9.0cm、器高1.0cm。胎土は概ね精良で、色調は明るい橙褐色。201は口径9.2cm、器高1.25cm。胎土は精良で、色調は明るい橙褐色。202は口径8.4cm、器高1.4cmに復元される。胎土は精良で、色調は浅い黄みの橙褐色。203は口径8.8cm、器高1.3cmを測るほぼ完形品。胎土は概ね精良で、色調は明るい橙褐色。204は口径9.6cm、器高1.3cmに復元される。胎土は概ね精良で、色調は浅い橙褐色。205～209は底部篋切りの土師器杯。205は口径15.3cm、器高3.2cmに復元される。胎土はやや粗く、色調は浅い橙褐色。206は口径16.0cm、器高3.5cmを測る完形品。胎土はやや粗く、色調は明るい橙褐色。207は口径15.6cm、器高3.5cmを測る完形品。胎土は概ね精良で、色調は明るい橙褐色。208は口径15.4cm、器高3.6cmを測る完形品。胎土は精良で、色調は明るい橙褐色。209は口径14.8cm、器高4.0cmに復元される。胎土は概ね精良で、色調は明るい橙褐色。210は青磁皿で、口径10.7cm、器高2.8cmに復元される。胎土は精良で、色調は黄みの明灰色を呈す。211は青磁

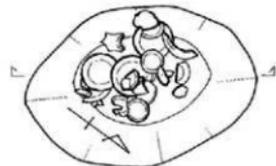


SK-001

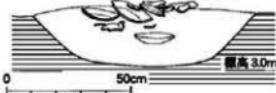


高さ3.0m

高さ2.5m



SK-004



高さ3.0m

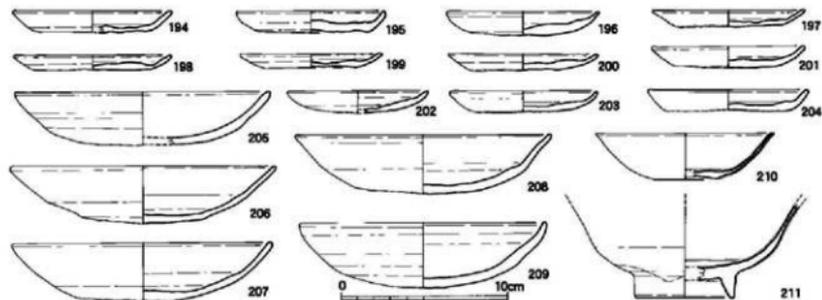
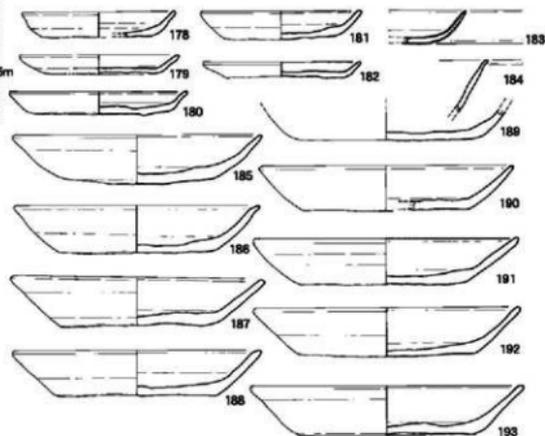
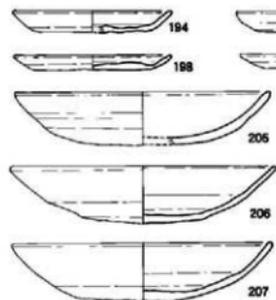


図50 SK-001 遺物出土状況(西から)

図51 SK-001、004 遺物出土状況及び出土遺物実測図(縮尺 1/20、1/3)

碗で、底径6.0cmに復元される。胎土は精良で、色調は黄みの明灰色を呈す。

SK-005 (図57)

SK-005は、B-2グリッドで検出された。切り合い関係はなく、遺存状況は良好である。検出面での掘り方は、長さ0.65m、幅0.55mを測る不整形な楕円形を呈する。掘削はやや急傾斜で行われ、検出面からの深さは約0.45mを測る。

出土遺物 (図64)

覆土からの底部篋切りの土師器坏が出土した。

403は口径16.0cm、器高3.3cmを測る完形品。胎土は精良で、色調は明るい橙褐色を呈す。

SK-006 (図52、61)

SK-006は、B-2グリッドで検出された。攪乱に切れられ、土壌やピットを切る。検出面での掘り方は、長径2.3m、短径2.0mを測る不整形な楕円形を呈する。掘削はやや急傾斜で行われ、検出面からの深さは約1.2mを測る。

出土遺物 (図53)

覆土からの出土遺物は、底部回転糸切りと篋切

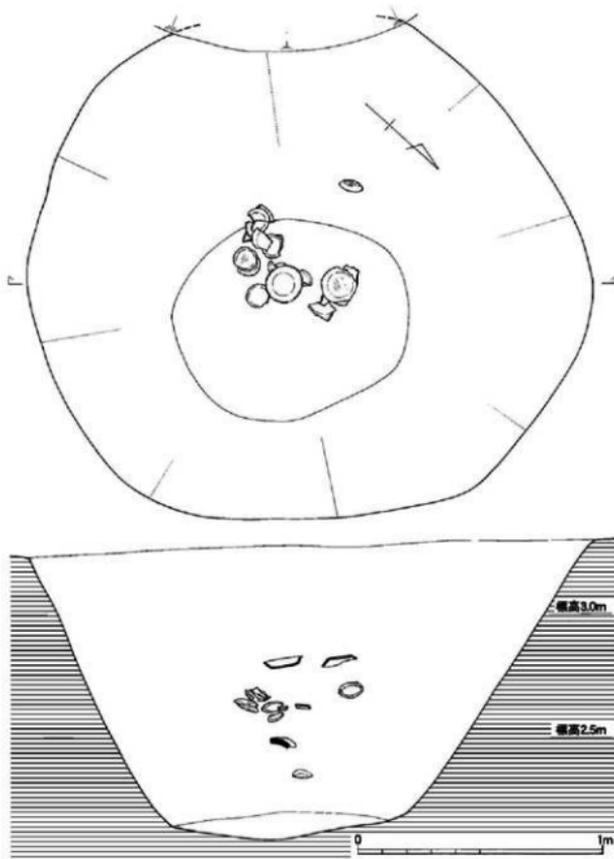


図52 SK-006 遺物出土状況実測図 (縮尺 1/20)

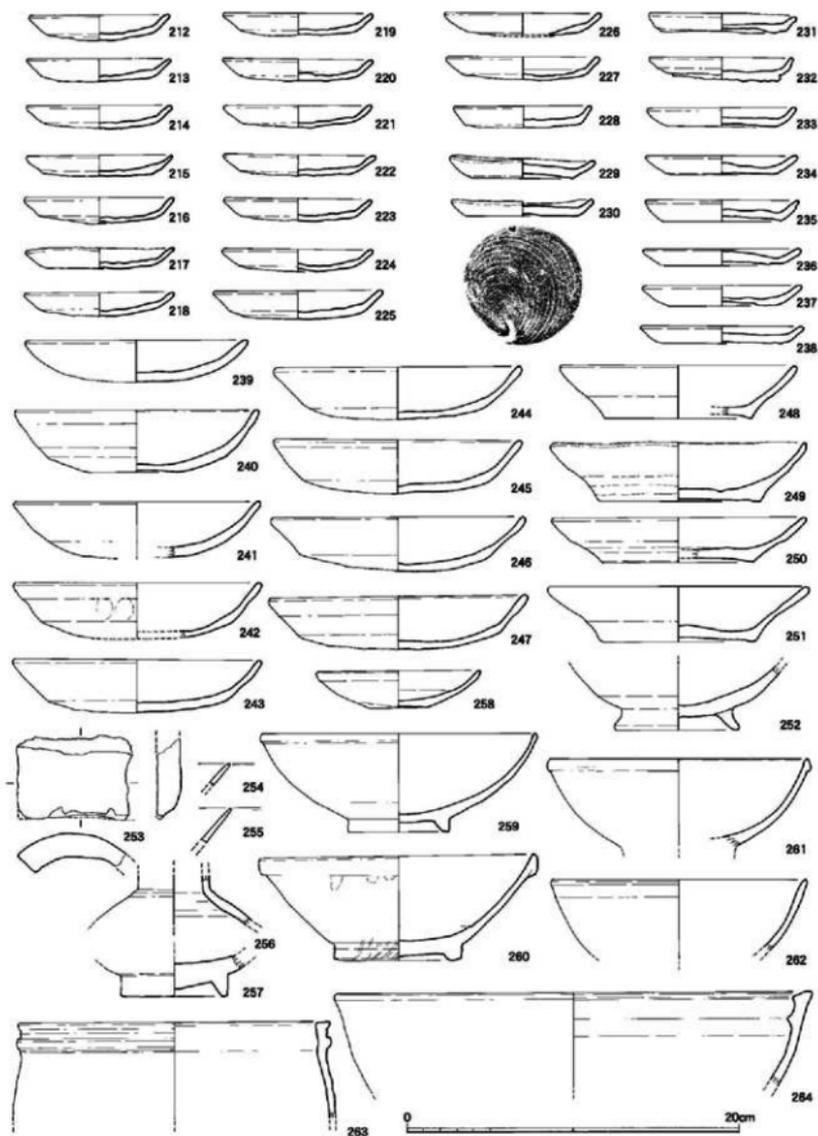


图 53 SK-006 出土遺物実測図 (縮尺 1/3、1/4)

りの土師器(皿、杯)が主体で、前者がやや多い。このほか瓦器(碗)、白磁(碗、皿)、越州窯系青磁(碗、瓶)などが少量出土した。

212～227は底部寛切りの土師器皿である。212は口径8.4cm、器高1.5cm。胎土は概ね精良で、色調はにぶい橙色。213は口径8.6cm、器高1.4cmの完形品。胎土は概ね精良。214は口径9.0cm、器高1.5cm。胎土は概ね精良で、色調はにぶい橙色。215は口径8.8cm、器高1.3cmのほぼ完形品。胎土は概ね精良で、色調はにぶい橙色。216は口径8.9cm、器高1.5cm。一部が欠損する。胎土は概ね精良で、色調はにぶい橙色。217は口径8.8cm、器高1.3cmのほぼ完形品。胎土は概ね精良で、色調はにぶい橙色。218は口径8.8cm、器高1.5cmのほぼ完形品。胎土は概ね精良で、色調はにぶい橙色。219は口径8.8cm、器高1.4cmのほぼ完形品。胎土は概ね精良で、色調は橙色。220は口径8.9cm、器高1.35cmに復元。胎土は概ね精良で、色調はにぶい橙色。221は口径8.9cm、器高1.3cmのほぼ完形品。胎土に白色砂粒を含み、色調は橙色。222は口径9.0cm、器高1.3cm。胎土は概ね精良で、色調はにぶい橙色。223は口径8.7cm、器高1.4cmのほぼ完形品。胎土は概ね精良で、色調は橙色。224は口径8.8cm、器高1.3cmの完形品。胎土はやや粗く、色調は橙色。225は口径10.0cm、器高1.7cmの完形品。胎土は概ね精良で、色調は灰白色。226は口径9.2cm、器高1.4cmに復元。胎土は概ね精良で、色調はにぶい黄褐色。228は口径9.0cm、器高1.5cm。胎土は概ね精良で、色調はにぶい橙色。

228～238は底部回転系切りの土師器皿である。228は口径8.1cm、器高1.3cmのほぼ完形品。胎土は概ね精良で、色調はにぶい黄褐色。229は口径8.5cm、器高1.4cmのほぼ完形品。胎土は概ね精良で、色調はにぶい橙色。230は口径8.6cm、器高1.0cmのほぼ完形品。胎土はやや粗く、色調は橙色。231は口径8.8cm、器高1.2cmの完形品。胎土は概ね精良で、色調は浅黄褐色。232は口径8.5cm、器高1.5cm。胎土は概ね精良で、色調は明褐色。233は口径8.8cm、器高1.2cm。

胎土は概ね精良で、色調はにぶい橙色。234は口径8.8cm、器高1.2cmに復元される。胎土は概ね精良で、色調はにぶい橙色。235は口径9.0cm、器高1.3cmのほぼ完形品。胎土は概ね精良で、色調はにぶい橙色。236は口径9.3cm、器高1.0cmのほぼ完形品。胎土は概ね精良で白色細砂を多く含み、色調はにぶい橙色。237は口径9.4cm、器高1.25cmに復元される。胎土は概ね精良で、色調は橙色。238は口径9.6cm、器高1.1cm。胎土は概ね精良で、色調はにぶい橙色。

239～247は底部寛切りの土師器杯である。239は口径13.2cm、器高2.6cmに復元される。胎土は概ね精良で、色調はにぶい橙色。240は口径14.5cm、器高3.8cmに復元される。胎土は概ね精良で、色調は灰白色～にぶい橙色。241は口径14.6cm、器高3.4cmに復元される。胎土は概ね精良で、色調は灰白色。242は口径14.6cm、器高3.3cmに復元される。胎土はやや粗く、色調はにぶい橙色。243は口径14.7cm、器高3.3cmに復元される。胎土に白色細砂を多く含み、色調は橙色。244は口径14.7cm、器高3.2cmに復元される。胎土はやや粗く、色調はにぶい橙色。245は口径14.6cm、器高3.3cm。胎土はやや粗く、白色細砂を多く含む。色調は灰白色。

248～251は底部回転系切りの土師器杯。248は復元口径14.0cm、器高3.2cm。胎土は概ね精良、色調にぶい橙色。249は口径15.2cm、器高3.6cmのほぼ完形品。胎土は概ね精良、色調にぶい橙色。250は復元口径15.1cm、器高2.7cm。胎土は概ね精良、色調にぶい橙色。251は復元口径15.6cm、器高3.4cm。胎土はやや粗く、色調にぶい橙色。252は土師器高台付杯。底径7.3cm。

253は丸瓦片である。254、255は越州窯系青磁碗の口縁部小片である。胎土に白色・黒色細粒を多く含む。施釉は薄く、色調はオリーブ灰色。256は頸部径4.3cmに復元される越州窯系青磁壺もしくは瓶の頸部片である。体部と頸部の境界に2条の沈線が巡り、頸部は真直ぐ立ち上がる。胎土は非常に精良。内・外器面に施釉、色調はオリーブ黄色。257は白磁碗の底部片。258は白磁皿で、

口径9.8cm、器高2.3cm、底径3.4cm。胎土は概ね精良で、色調は灰白色。259～262は白磁碗。259は復元口径16.4cm、器高6.0cm、底径6.1cm。口縁部玉縁は小さい。胎土に白色・黒色細粒を多く含み、色調は灰白色。260は口径16.6cm、器高6.3cm、底径7.7cm。口縁部玉縁で、胎土に白色・黒色細粒を多く含み、色調は灰白色。261の玉縁はやや小さく、復元口径15.0cm。262は復元口径15.3cm。263は褐釉陶器甕で、復元口径18.8cm。口縁部は外方に肥厚し、直下に1条の突帯が巡る。胎土は概ね精良である。264は陶器鉢の口縁部小片で、復元口径28.2cm。口縁部の内器面側に2条の突帯が巡る。胎土は粗く、白色粗砂を多く含む。色調は内器面が褐灰色、外器面にぶい赤褐色を呈す。

SK-009 (図54、55)

SK-009は、B-2グリッドで検出された。ピットに切られるが、遺存状況は良好である。検出面での掘り方は、直径1.8mを測る不整形な円形を呈する。掘削はやや急傾斜で行われ、検出面からの深さは約1.25mを測る。

出土遺物 (図56)

覆土からの出土遺物の大多数は、底部篋切りの土師器(皿、坏)で、底部回転系切りの土師器は非常に少ない。このほか白磁碗が数点出土した。また、スサを多く含んだ炉壁と考えられる焼土塊が土師器とともに投棄されていた。

265～327は土師器皿で、このうち269と290が底部回転系切り、そのほかは底部篋切りである。完形品もしくはほぼ完形のものが多い。法量は口径8.0～10.2cm、器高1.0～1.7cmを測る。色調は明るい橙褐色～灰みの橙褐色を呈す。328～344は底部篋切りの土師器坏。完形品もしくはほぼ完形のものが多い。法

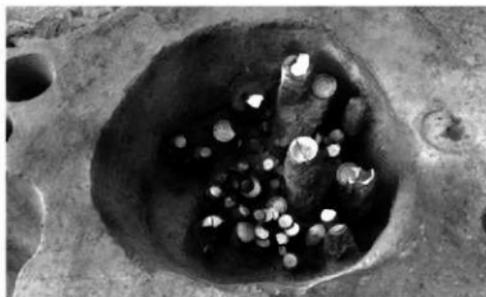


図54 SK-009 遺物出土状況 (東から)

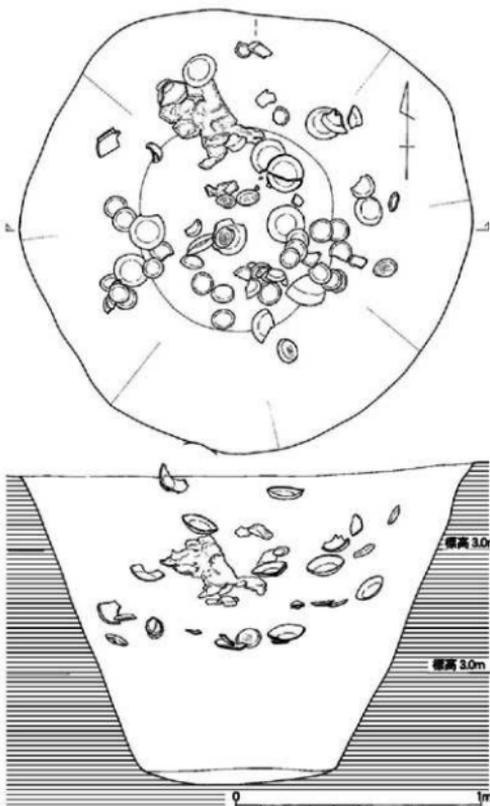


図55 SK-009 遺物出土状況実測図 (縮尺 1/20)

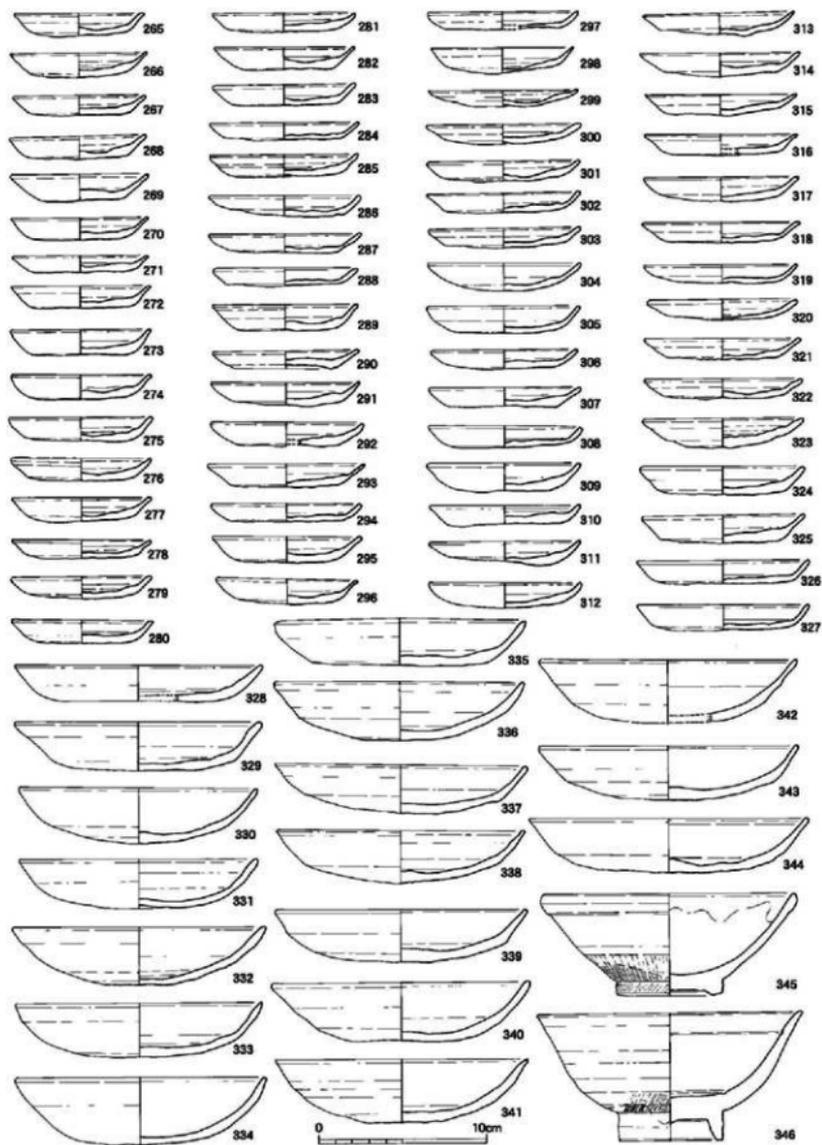


图 56 SK-009 出土遺物実測図 (縮尺 1/3)

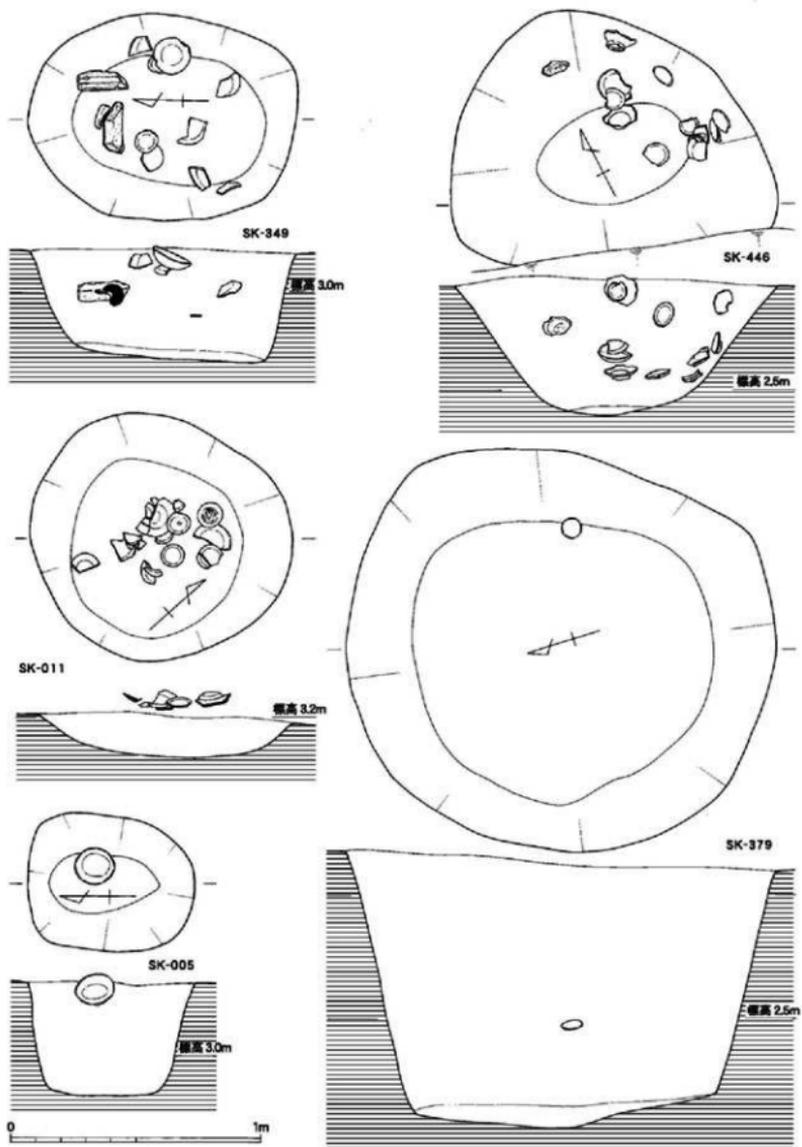


图 57 16-B区土坑遺物出土状況実測図(縮尺 1/20)

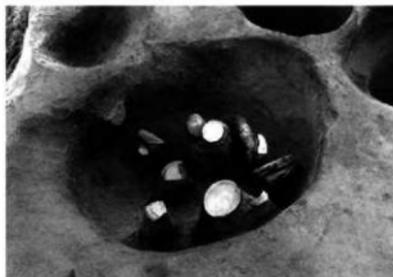


図 58 SK - 349 遺物出土状況 (東から)



図 59 SK - 446 遺物出土状況 (西から)



図 60 SK - 004 遺物出土状況 (西から)



図 61 SK - 006 遺物出土状況 (西から)

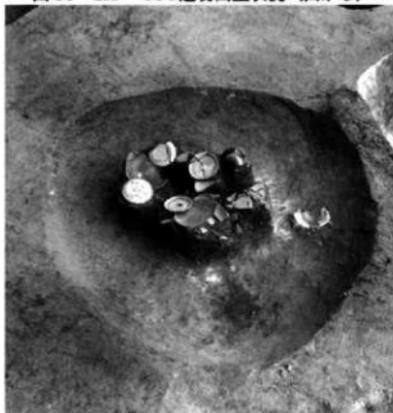


図 62 SK - 011 遺物出土状況 (西から)

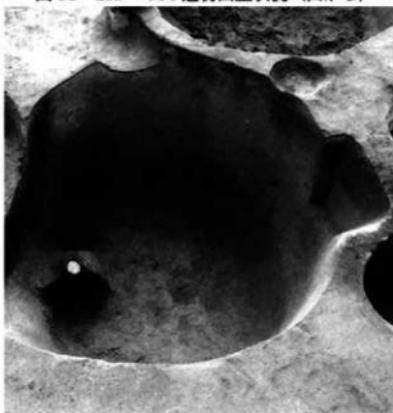


図 63 SK - 379 遺物出土状況 (北から)

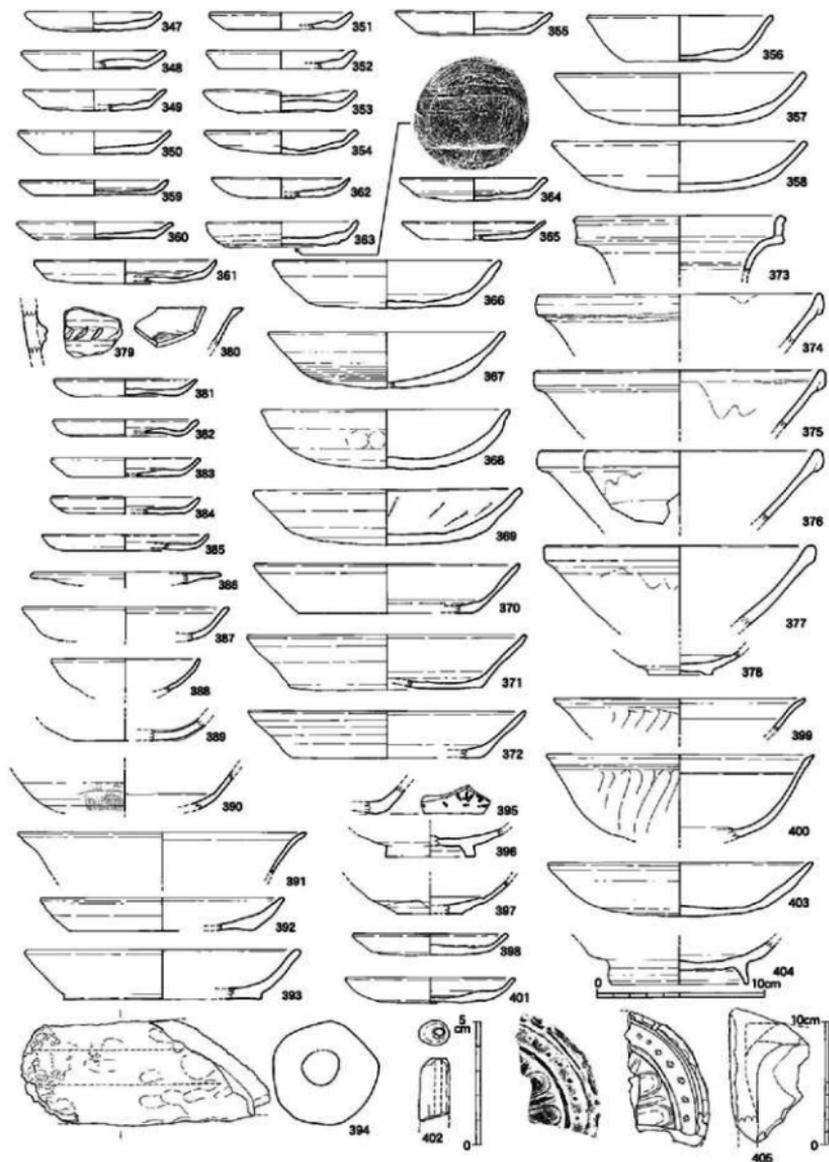


图64 16-B区土坑出土遗物实测图(缩尺1/3)

量は口径14.5～15.6cm、器高3.0～4.1cmを測る。色調は明るい橙褐色～赤みの灰褐色を呈す。

345は白磁碗で、口径15.6cm、器高6.25cm、底径6.4cmに復元される。口縁部は玉縁で高台は非常に低い。胎土は概ね精良で、色調は青みの白色を呈す。346は白磁碗で、口径16.0cm、器高7.8cm、底径6.2cmに復元される。口縁端部はやや外反し、高台はやや高い。胎土は概ね精良で、色調は明るい灰色を呈す。

SK-011 (図57、51)

SK-006は、B-2グリッドで検出された。ピットを切るのみで遺存状況は良好と考えられる。検出面での掘り方は、長径1.1m、短径0.95mを測る不整形な楕円形を呈する。掘削は緩やかで、検出面からの深さは約0.15mを測るが、遺物の出土状況から検出時に上面を大きく削平しており、掘り込みは砂層面からではなく、その上層から行われたものと判断される。

出土遺物 (図64)

覆土からの出土遺物は、底部回転糸切りと篋切りの土師器(皿、坏)が主体で、両者が混じって出土している。

348、351、353、355は底部回転糸切りの土師器皿である。口径は8.5cm～9.1cm、器高は1.0cm～1.4cmを測る。351以外は完形品もしくはほぼ完形に近い。いずれも胎土は概ね精良で、白色細粒を多く含む。色調はにぶい橙褐色を呈す。347、349、350、352、354は底部篋切りの土師器皿である。口径は8.0cm～9.0cm、器高は1.2cm～1.5cmを測る。347、354は完形品もしくは完形に近い。いずれも胎土は概ね精良、白色細粒を多く含むが、354は胎土がやや粗く、白色粗砂を少量含む。色調は橙褐色～にぶい橙褐色を呈す。

SK-349 (図57、58)

SK-349は、B-2グリッドで検出された。他の遺構との切りあい関係はなく、遺存状況は比較的良好であるものと考えられる。検出面での掘り方は、長径1.1m×短径0.85mを測る不整形な楕円形を呈する。掘削角度はややきつく、検出面からの深さは約0.45mを測る。

出土遺物 (図64)

覆土からの出土遺物は、底部篋切り及び回転糸切りの土師器(皿、坏)や瓦器碗片、白磁碗が出土したほか、高麗陶器と推定される壺の口縁部片や輪羽口片が出土している。

359～365は土師器皿で、363のみ底部回転糸切りである。他は全て底部篋切りである。363は口径9.0cm、器高1.5cmを測る完形品である。胎土は概ね精良で、色調は浅黄橙を呈す。底部篋切りの土師器皿は、口径8.0cm～9.0cm、器高は1.2cm～1.5cmを測る。347、354は完形品もしくは完形に近い。いずれも胎土は概ね精良、白色細粒を多く含む。色調は橙褐色～にぶい橙褐色を呈す。366～369は底部篋切りの土師器坏である。口径は13.6cm～18.0cm、器高は2.95cm～3.6cmに復元される。368はほぼ完形品に近い。いずれも胎土は概ね精良で、白色細粒を多く含む。色調は橙褐色～にぶい橙褐色を呈す。370～372は底部回転糸切りの土師器坏である。口径は16.0cm～16.6cm、器高は2.8cm～3.3cmに復元される。いずれも胎土は概ね精良で、白色細粒を多く含む。色調は橙褐色～にぶい橙褐色を呈す。374～377は玉縁口縁の白磁碗片である。373は高麗産と推定される陶器壺の口縁部片で、口径12.1cmに復元される。頸部は喇叭状に外反し、口縁部は上方で立ち上がる。口縁部外器面の上下2ヶ所に突帯が付く。胎土は概ね精良で、黒色細粒を少量含む。焼成は硬質で、色調は黒褐色を呈す。374は復元口径16.8cm、胎土は概ね精良で、色調は灰白色。375は復元口径17.0cm、胎土は概ね精良で黒色細粒を含む。色調は灰白色。376は復元口径16.4cm、胎土は概ね精良で白色・黒色細粒を含む。色調は灰白色。377は復元口径16.0cm、胎土は概ね精良で黒色細粒を含む。色調は灰白色。378は白磁皿(もしくは碗)の底部片で、底径3.9cmを測る。胎土は概ね精良で、色調は灰白色を呈す。394は輪羽口片で、断面の形状は直径約8.5cm、孔径約3.0cmを測る不整形な円形を呈す。外器面には指頭圧痕が認められる。残存長は20.0cmを測るが、片側端部は元来の形状を留め、被熱して溶解して

いる。胎土は粗く、白色粗砂を多く含む。色調は灰色～橙色を呈す。

SK-379 (図57、63)

SK-379は、B-2グリッドで検出された。土塚やピットを切るが、他の遺構や攪乱には切られておらず、遺存状況は良好と考えられる。検出面での掘り方は、長径1.7m、短径1.6mを測る不整形な楕円形を呈する。掘削角度は急峻で、検出面からの深さは約1.1mを測る。

出土遺物 (図64)

覆土からの出土遺物は、底部回転系切りの土師器(皿、坏)や白磁(碗、皿)、青磁(碗、皿)、磁土窯系陶器製の小片などのほか、弥生土器小片1点と青銅鏡1枚が出土している。

379は弥生土器小片で、刻目突帯が付く。胎土はやや粗く白色粗砂を含む。色調は橙褐色を呈する。381～385は底部回転系切りの土師器皿で、口径は8.6cm～10.0cm、器高1.0～1.2cmに復元される。胎土は概ね精良で、色調はうすい黄みの橙褐色を呈する。386は口径11.6cmに復元され、形状から高台付皿片と推定される。胎土は概ね精良で、色調はうすい橙褐色を呈する。387、392、393は底部回転系切りの土師器坏片で、口径は12.4cm～16.6cm程度に復元される。胎土は概ね精良で、色調はうすい黄みの橙褐色を呈する。388は白磁皿で、口径8.8cmに復元される。胎土は精良で、色調は黄みの白色を呈する。389は青磁皿の底部片で、底径6.4cmに復元される。底部は露胎、胎土は精良で、色調は明るい灰みの黄緑色を呈する。390は白磁碗の底部片。器壁は薄く、胎土は精良で、色調は明灰色を呈する。391は白磁碗の口縁部片で、復元口径17.3cm。胎土は概ね精良で、黒色細粒を含む。薄く施釉され、色調は黄みの白色を呈する。青銅鏡は例言頁に記している。

SK-446 (図57、59)

SK-446は、B-2グリッドで検出された。溝等に切られる。検出面での掘り方は、長径1.3m×短径1.1m程度の不整形な形状を呈すると推測されるが、明確でない。掘削角度はやや緩やかで、検出面からの深さは約0.55mを測る。

出土遺物 (図65)

覆土からの出土遺物は、底部篋切りの土師器(皿、坏、高台付皿、高台付坏)や、青磁碗小片、平瓦片などが出土している。

406～421は底部篋切りの土師器皿である。406は口径10.6cm、器高1.1cm。胎土は精良で色調は薄い橙褐色。407は口径9.8cm、器高1.2cm。胎土は精良で、色調は明るい灰みの橙褐色。408は復元口径10.0cm、器高1.1cm。胎土は精良で、色調は薄い橙褐色。409は口径9.9cm、器高1.2cm。胎土は精良で、色調は浅い橙褐色。410は口径9.9cm、器高1.3cm。胎土は精良で、色調は浅い橙褐色。411は口径10.7cm、器高1.0cm。胎土は概ね精良で、色調は薄い橙褐色。412は口径10.2cm、器高1.4cmの完形品。胎土は概ね精良で、色調は薄い橙褐色。413は口径10.4cm、器高1.1cm。胎土は概ね精良で、色調は明るい灰褐色。414は口径10.2cm、器高1.2cm。胎土は概ね精良で、色調は薄い橙褐色。415は口径10.6cm、器高1.3cm。胎土は精良で、色調は薄い橙褐色。口縁部が「て」字状を呈し、京系土師器皿の模倣品と考えられる。416は口径10.6cm、器高1.1cm。胎土は概ね精良で、色調は薄い橙褐色。417は口径11.0cm、器高1.2cm。胎土は概ね精良で、色調は薄い橙褐色。418は口径10.8cm、器高2.0cm。胎土は概ね精良で、色調は黄みの明るい灰色。419は口径10.2cm、器高1.8cm。胎土は精良で、色調は薄い橙褐色。420は口径10.2cm、器高2.3cm。胎土は精良で、色調は薄い橙褐色。422は土師器高台付坏で、口径12.2cm、器高2.4cm、底径3.4cmに復元。胎土は概ね精良で、色調は浅い橙褐色。

423～431は土師器坏である。423は復元口径12.8cm、器高3.2cm。胎土は概ね精良で、色調は薄い橙褐色。424は口径13.0cm、器高3.2cm。胎土は概ね精良で、色調は浅い橙褐色。425は口径13.0cm、器高2.1cm。胎土は概ね精良で、色調は薄い橙褐色。426は復元口径13.6cm。胎土は概ね精良で、色調は薄い橙褐色。427は復元口径15.2cm。胎土は概ね精良で、色調は浅い橙褐色。428は口径15.0cm、器高3.5cm。胎土は概ね精良

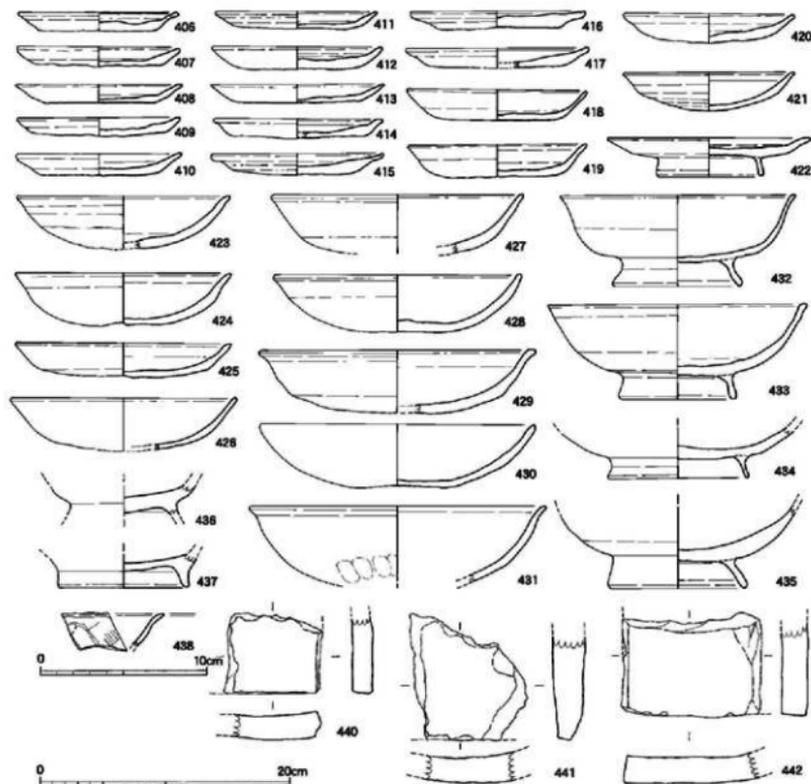


図 65 SK-446 出土遺物実測図 (縮尺 1/3)

で、色調は浅い橙褐色。429は口径16.6cm、器高3.8cm。胎土はやや粗く粗砂を含む。色調は浅い橙褐色。430は口径16.6cm、器高3.9cm。胎土はやや粗く白色細砂を少量含む。色調は薄い橙褐色。431は復元口径17.8cm。胎土はやや粗く粗砂を含む。色調は薄い橙褐色を呈す。

432～437は土師器高台付杯である。432は口径14.2cm、器高5.6cm、底径7.8cmに復元される。口縁端部が外反する。胎土は概ね精良で、色調は赤みの橙褐色。433は口径15.6cm、器高5.8cm、底径7.0cmに復元。胎土は概ね精良で、

色調は浅い橙褐色。434～437は底部片で、底径は434が8.4cm、435が8.4cm、437が7.9cmを測る。胎土はいずれも概ね精良で、色調は435が黄みの白色、他が薄い橙褐色を呈す。

438は青磁碗の口縁部小片である。口縁部の形状は、端部がやや外反するものとみられる。胎土は精良で、混入物は認められない。薄く施釉され、釉調は透明で嵌入がみられる。色調は黄みの明るい灰色を呈する。440から442は平瓦片。器面に布目痕と格子目叩きがみられる。焼成は良好で、色調は明るい灰色を呈する。

第4章 結 語

15区および16区で検出された遺構群の年代は、概ね弥生時代後期から古墳時代前・中期のもの、平安時代後期から鎌倉時代にかけての2時期に大きく分けられる。今回の報告では、時間的制約があるため十分な考察が行えないが、欠は今後補うものとし、ここでは遺構群のおおまかな時間的変遷を追うとともに、出土遺物とあわせて若干の所見を述べて結語に代えるものとする。

弥生時代後期から古墳時代の遺構

当該時期の遺構群としては、16-B区で検出された弥生時代後期の所産と考えられるST-2005 甕棺墓がもっとも古い。箱崎遺跡の東側は、宇美川に面した内陸側であり、西側の博多湾に面した海岸付近に比べて安定した環境であったものと考えられる。宮崎区画整理事業地内のこれまでの調査でも、弥生時代後期に遡る遺構が他に検出されていない。平安時代以降、集落の盛行によってこれらの遺構群が大きく破壊されていることが予想されるが、他の墓地群や、これに対応する集落が発見されておらず更なる調査成果をまって考察することにした。

今回の調査では、16区で古墳時代前期から中期と考えられる竪穴住居跡を都合7棟検出することができた。16区に隣接する第20次調査1区、2区や、やや北西側に位置する第8次調査地点においても古墳時代前期から中期にかけての竪穴住居跡が検出されており、この周辺に当該時期の小集落が形成されていたものと考えられる。また住居跡内からは、鉄片が検出されるものも含まれ、集落民が鉄製産に深く関わっていたことが窺える。また、後世の遺構からの出土ではあるが、飯蛸壺が2点出土しており、第8次調査区で出土した多量の飯蛸壺とあわせると、漁労とも深く関わっていたことが想定される。

同じく宮崎区画整理事業地内の調査区である第26次調査6区で検出された方形周溝墓や円形周溝墓、甕棺墓等や、同じく26次調査8区で検出

された甕棺墓群などは、この小集落跡から南へ約4～500m離れた地区から検出されている。概ね庄内、布留式併行期の所産であり、この北側の集落に対応する墓地と考えられる。

平安時代～鎌倉時代の遺構

15区の調査では、検出された遺構の年代から、13世紀後半以降と推定される整地層を検出した。遺構の密度は非常に低く、検出された遺構も、井戸や溝など僅かである。15区の南東から北西にかけては、箱崎遺跡の基盤層である黄褐色砂層が宇美川方向に向かって急激に落ちており、遺跡の限界と考えられてきたが、この時期に暗褐色砂質土で埋め立てを行い、集落域を拡大している様子が確認された。集落域拡大の契機は、現在のところ明確にできないが、元寇の際に中世箱崎集落は大規模に被災したことが文献の上からも明らかにされている。また、箱崎遺跡の北西側で調査された第31次調査地点や、第32次調査地点では、13世紀後半代と考えられる焼土層やそれ以後の整地層を検出しており、元寇等に関わる被災遺構として注目されている。本調査地点で検出された整地による集落域を拡大した痕跡も含めて、このような歴史的背景と資料の増加にあわせて今後の考察に委ねたい。

16区の集落遺構も、他の調査区と比較すると密度が低い。検出された遺構は、SK-004、446土壇などが12世紀前半代の所産と推定される。土師器のうち、底部の調整が寛切りのみのものを出土する遺構はあまり確認されていない。他の井戸や土壇には少量ながら底部糸切り調整のものが含まれており、SE-440、515井戸、SK-006、009、011、349土壇など12世紀後半の所産と考えられる。

このような状況は、隣接する第20次調査1区の考察でも述べられているように、12世紀前半に周辺が集落化し、12世紀中葉に集落の盛行を迎えるという所見と概ね一致するものである。

報 告 書 抄 録

ふりがな	はこぎにじゅうろく						
書名	箱崎26						
副書名	箱崎遺跡第30次調査報告(1)						
巻次	高崎区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告IV						
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第914集						
編著者名	松浦 一之介						
編集機関	福岡市教育委員会						
所在地	福岡市中央区天神一丁目8番1号 電話 092-711-4667						
発行年月日	平成18年12月28日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯 東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
はこぎいせき 箱崎遺跡 きんじゅうじ 30次	よくあかけんふくおかし 福岡県福岡市 ひらたくはこぎ 東区箱崎 いちようめ 一丁目	40131		33° 36' 59"	130° 25' 33" 2002.04.16 ~ 2003.03.31	1,487	区画整理
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物			特記事項
箱崎遺跡	集落	弥生時代 古墳時代 古代 中世	妻棺墓 竪穴住居 井戸 土壇	弥生土器 古式土師器・須恵器・飯前産 土師器・黒色土器・瓦器・須恵質土器 白磁・越州窯系青磁・龍泉窯系・阿安窯系青磁 瓦・土製品・滑石製品・青銅鏡			古墳時代前・中期集落 古代・中世集落

はこぎ 箱崎 26

— 箱崎遺跡第30次調査報告(1) —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第914集

平成18年12月28日

編集・発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目8番1号
電話 092-711-4667

印刷 昭和印刷有限会社
福岡市中央区草香江一丁目8番10号
電話 092-741-0989